



第6章 都市再生への提案

1.まともと展望

北川敏一郎
ファッションタウン創生推進協議会 運営委員長

このたび平成16年度「全国都市再生モデル調査」において創生市の「ノコギリ屋根建造物」を活用した創生市都市再生事業計画が採択され、全国的先導的な都市再生活動のひとつとして、国の支援を受け調査を実施することに、誠に心強く思うところである。

1.国づくりは地域づくり

今や地域の振興なくして日本の活性化はあり得ないことが認識され、その地域それぞれの活躍が期待されているところである。特に地域特性（個性）が生かされ、各地域活動が国全体の活力となることが求められている。

2.創生の地域特性

創生市は古くから世界的な絹織物産地として名を馳せ、近代化の日本の中にあって日本経済を支えるほどに繁栄をした都市であった。しかしながら戦後の欧米化の影響等繊維産業の衰退や現代社会の構造変革による急速な産業変化に対応せず、現代社会への進歩が余り進まなかったところである。幸か不幸か、織物という平和産業であった創生は戦災にも遭わず、従って古いものがそのままだるが残る結果となった。これがまさに「ノコギリ屋根建造物」を含む創生市の近代化遺産群である。

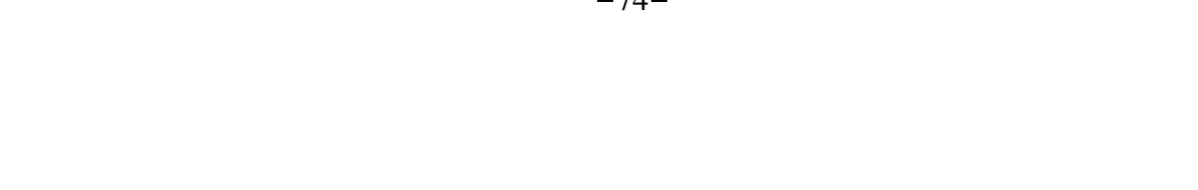
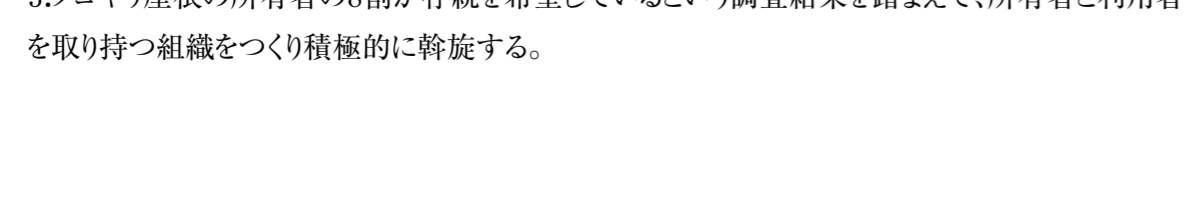
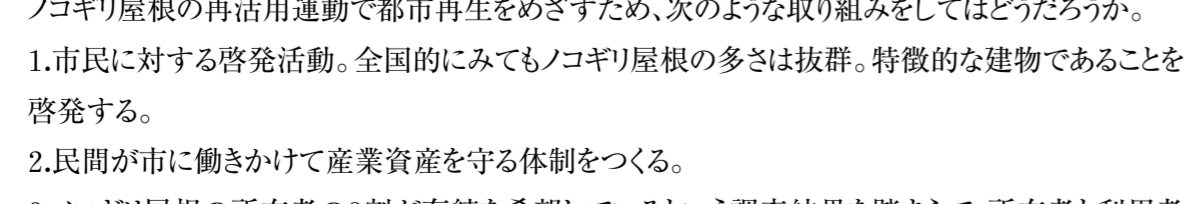
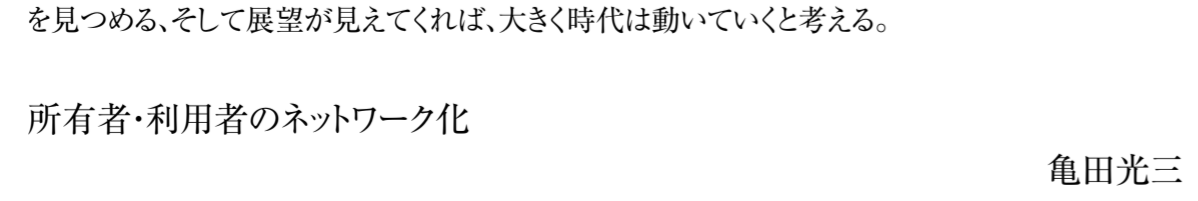
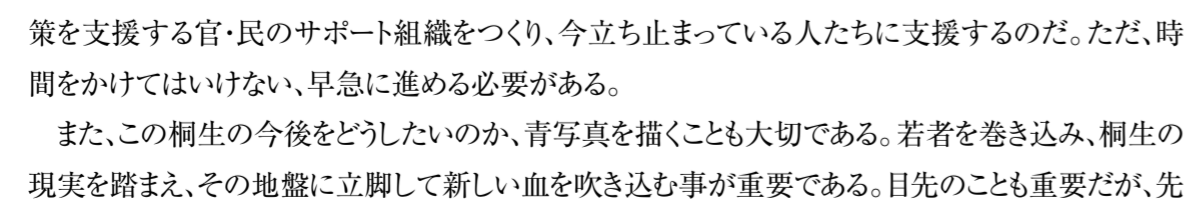
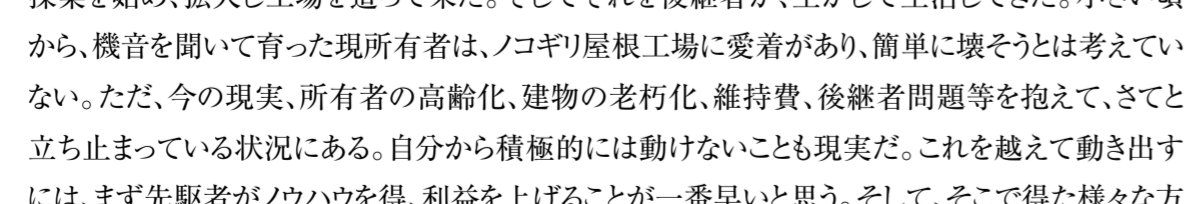
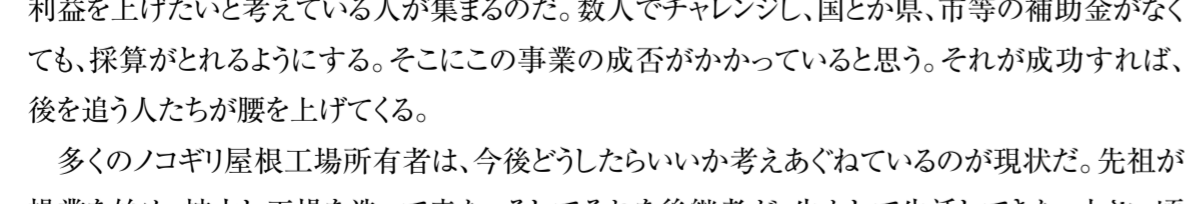
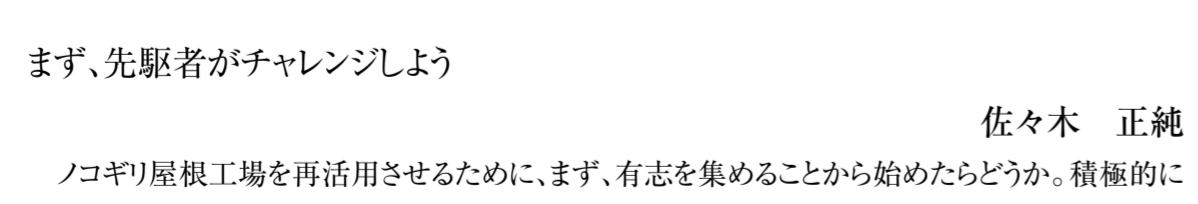
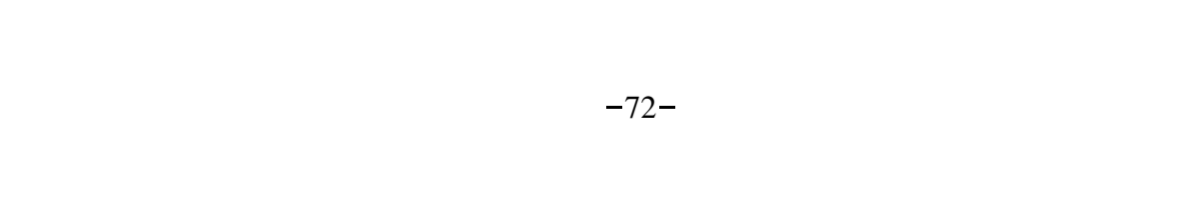
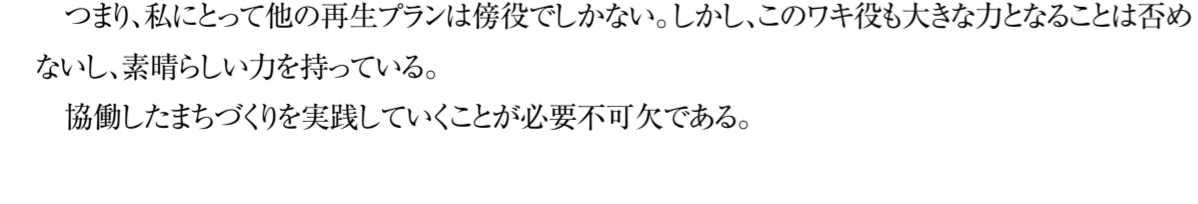
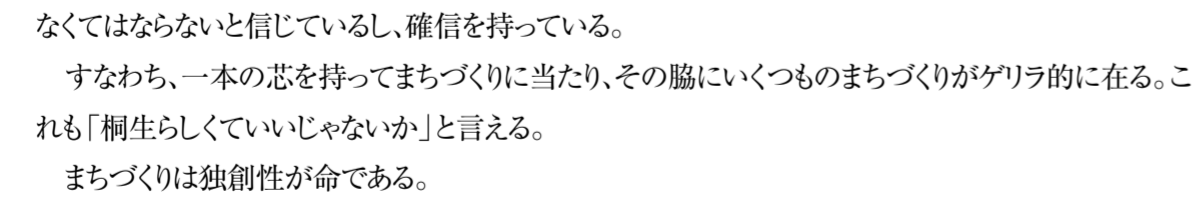
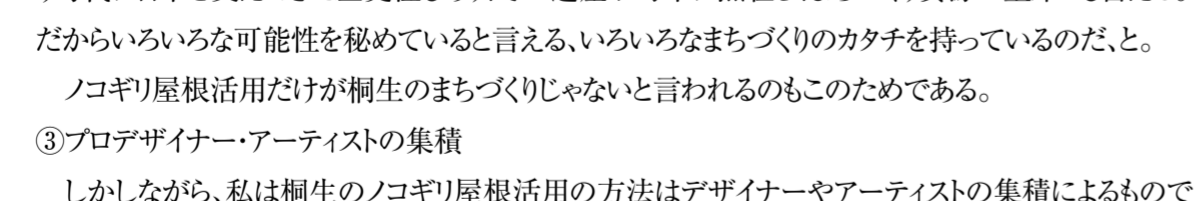
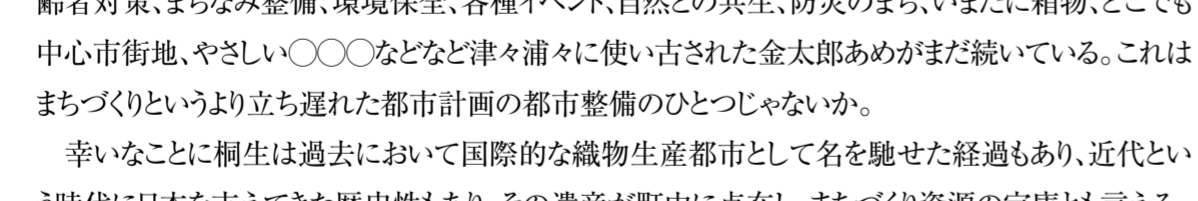
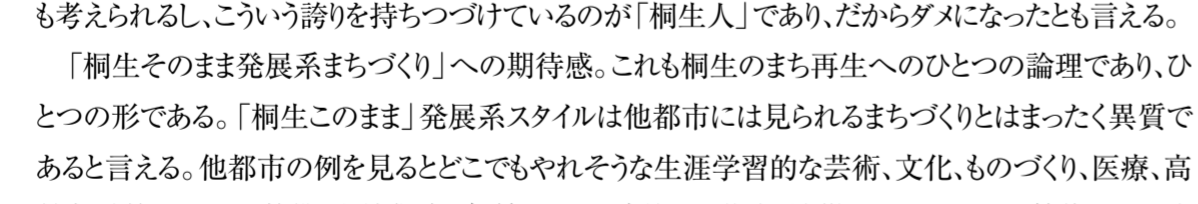
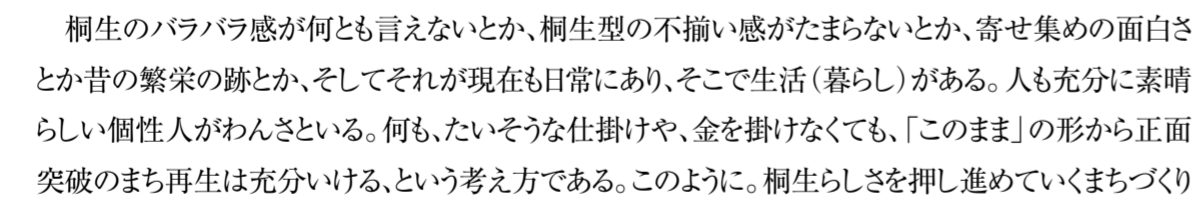
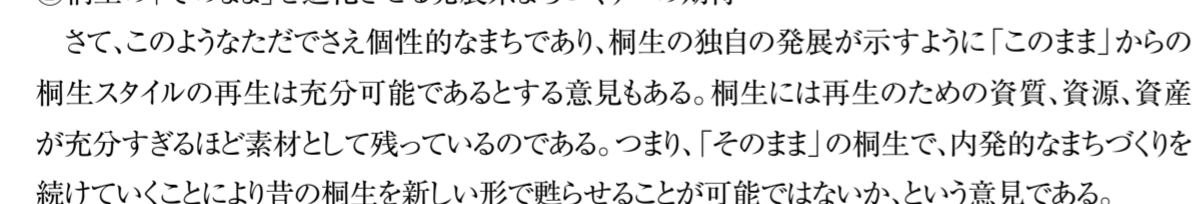
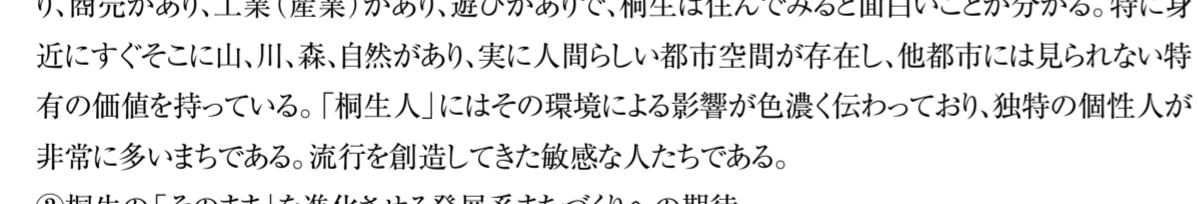
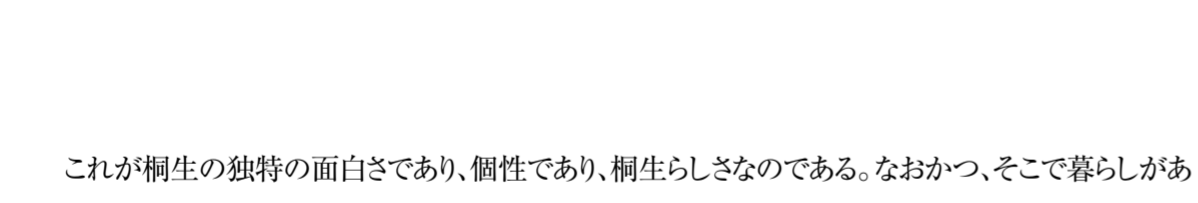
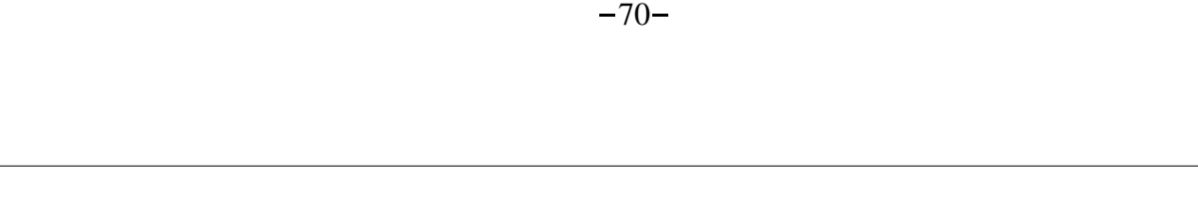
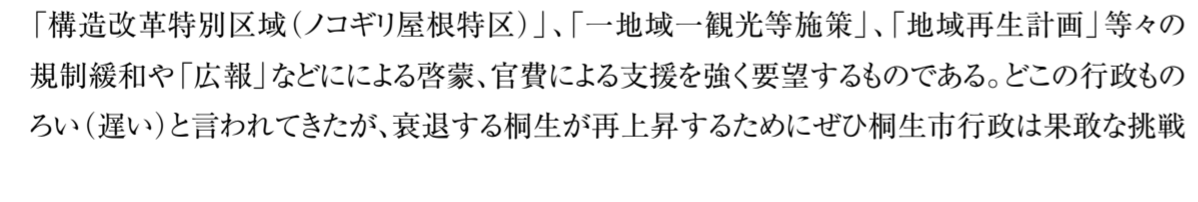
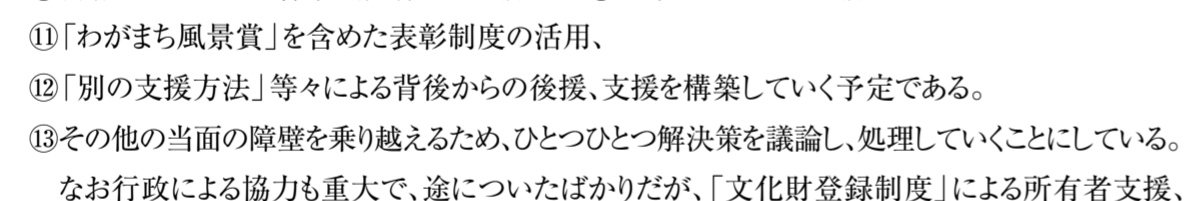
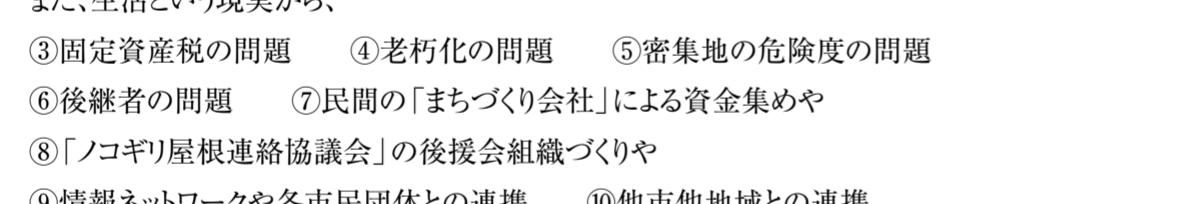
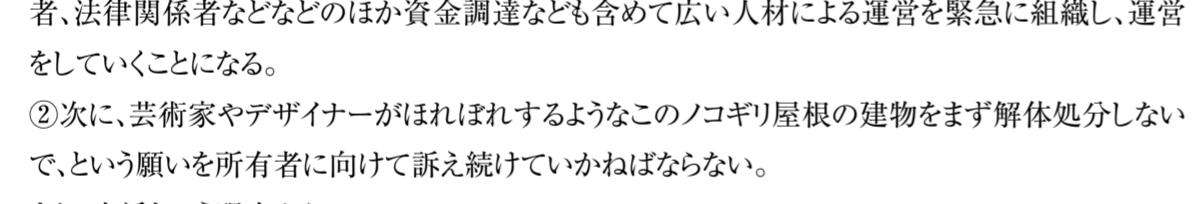
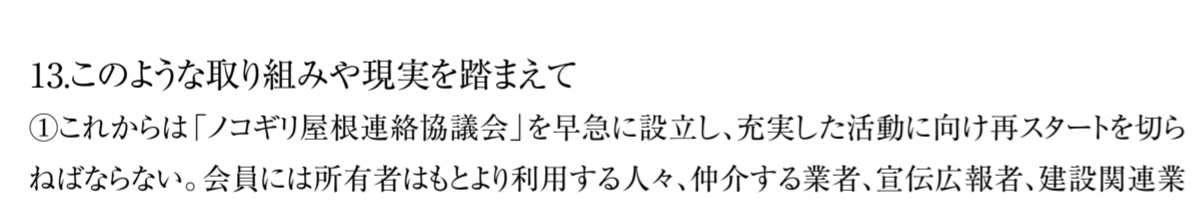
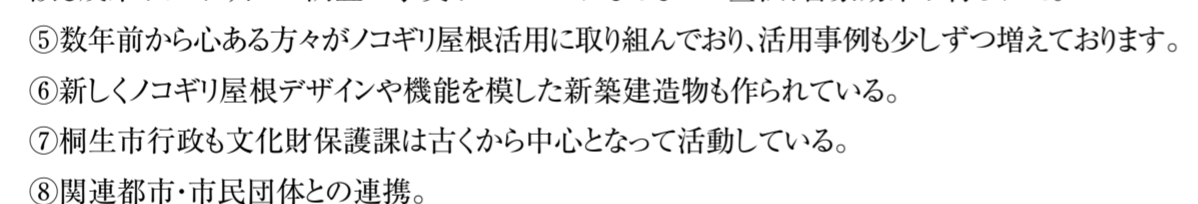
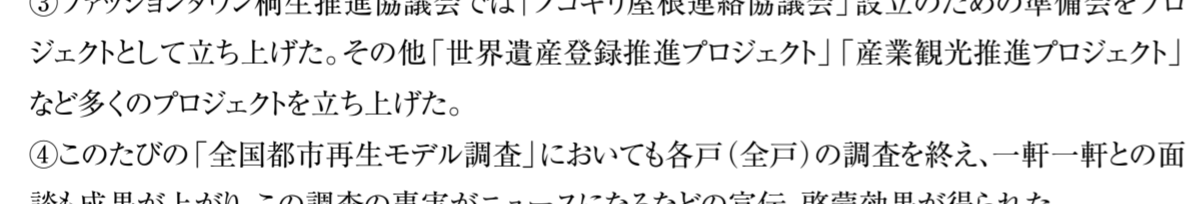
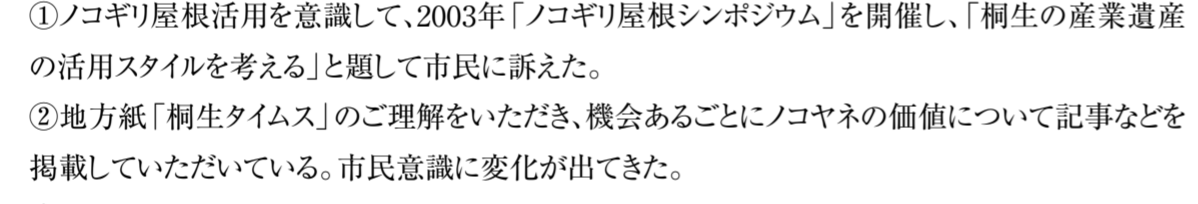
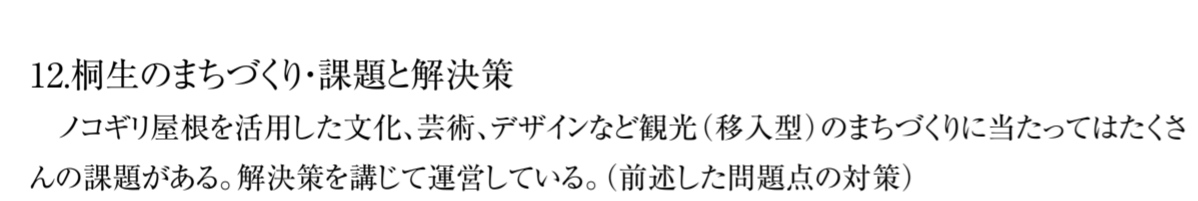
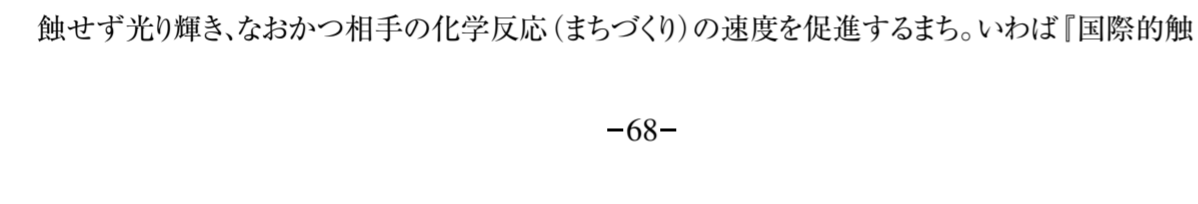
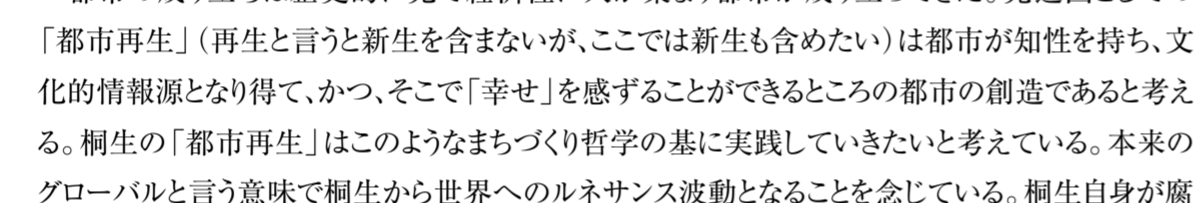
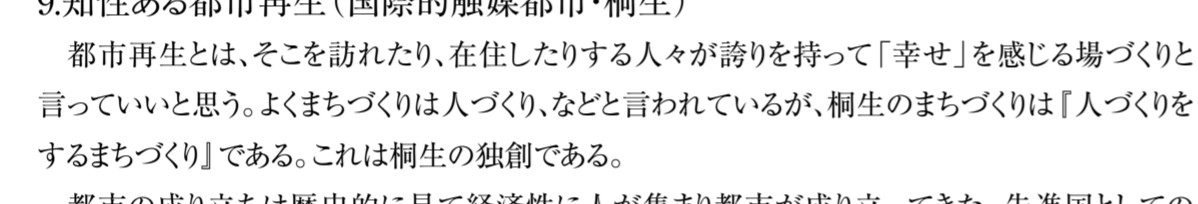
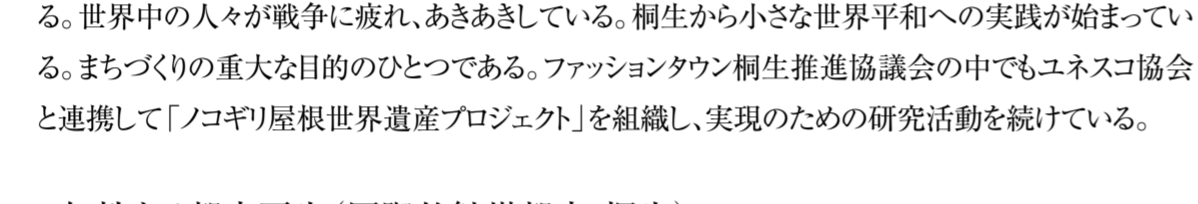
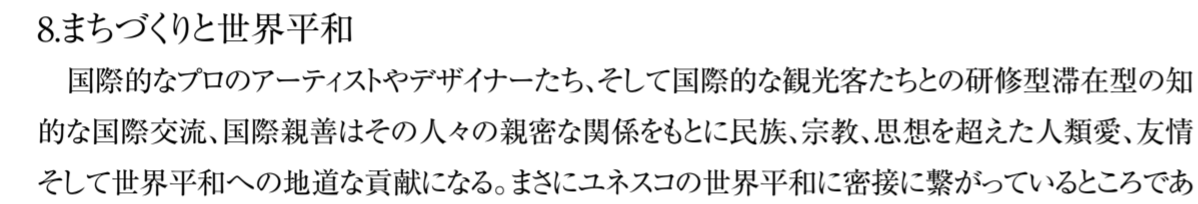
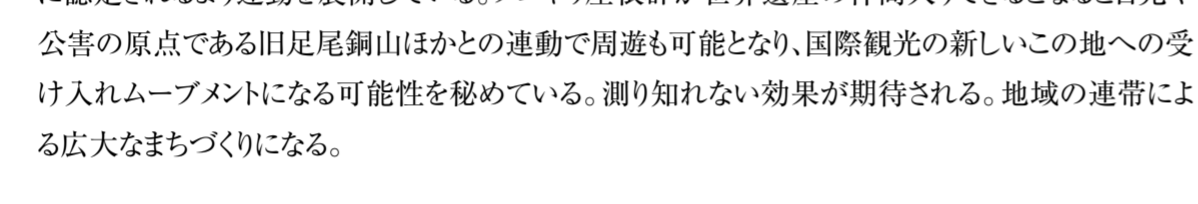
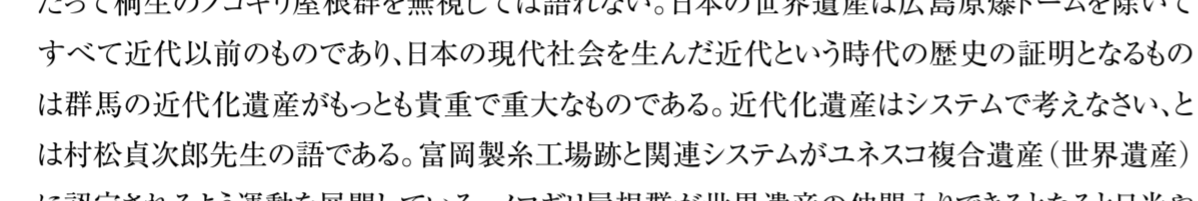
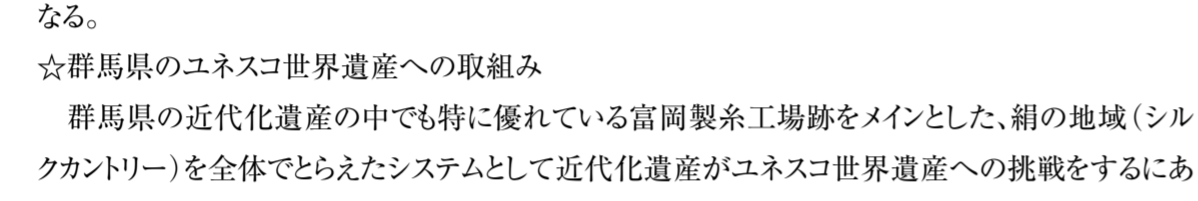
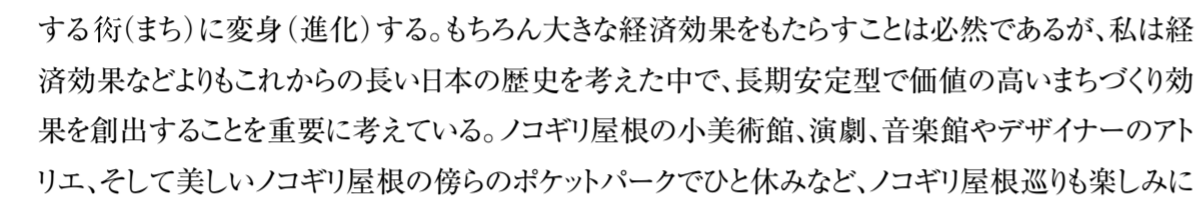
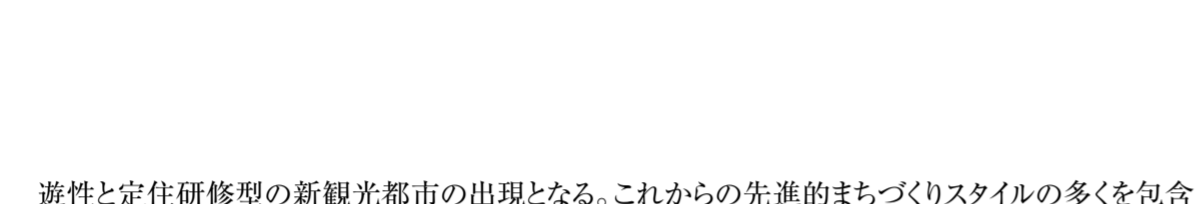
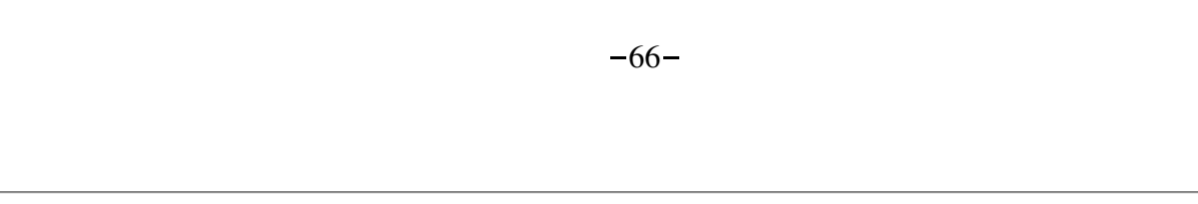
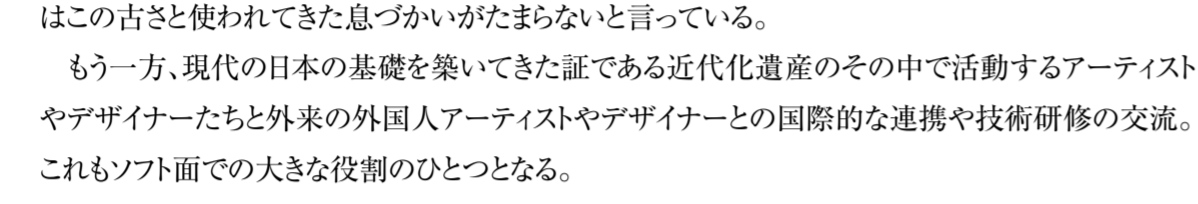
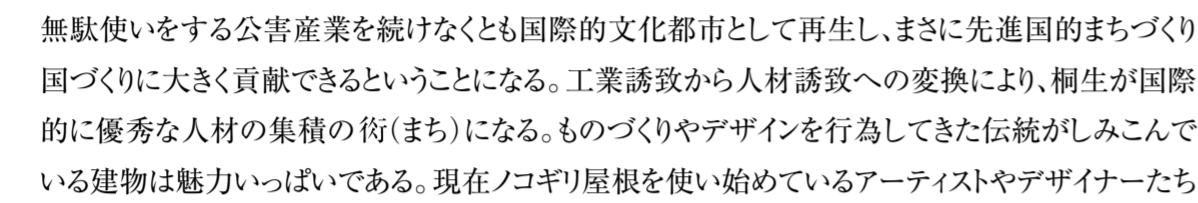
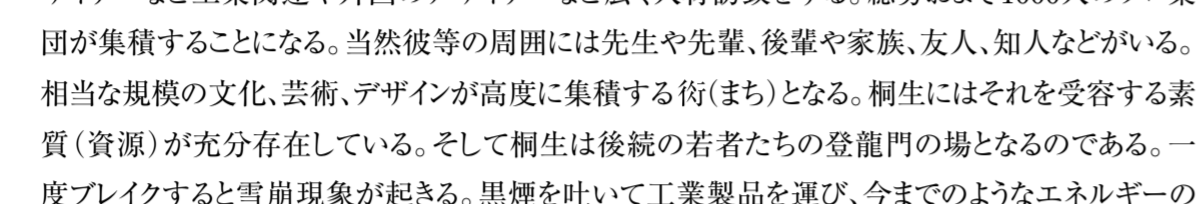
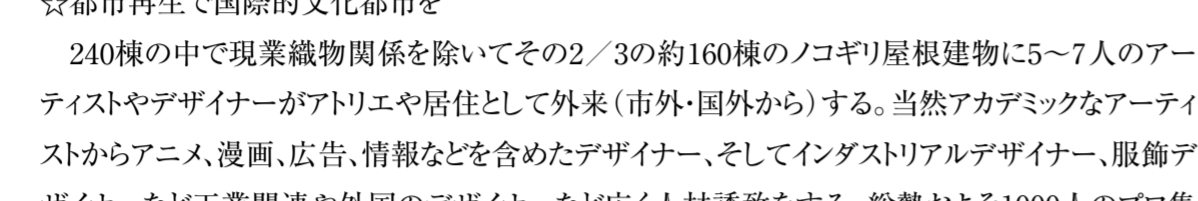
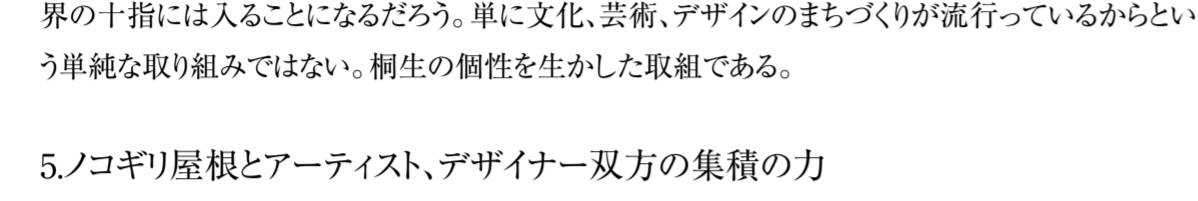
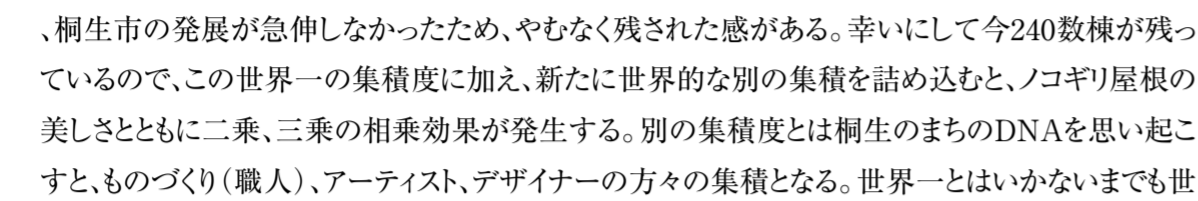
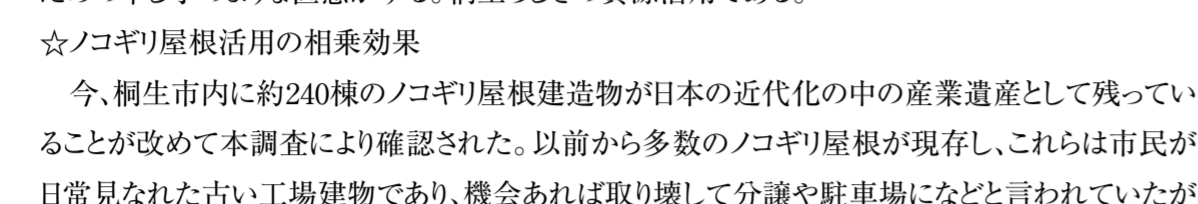
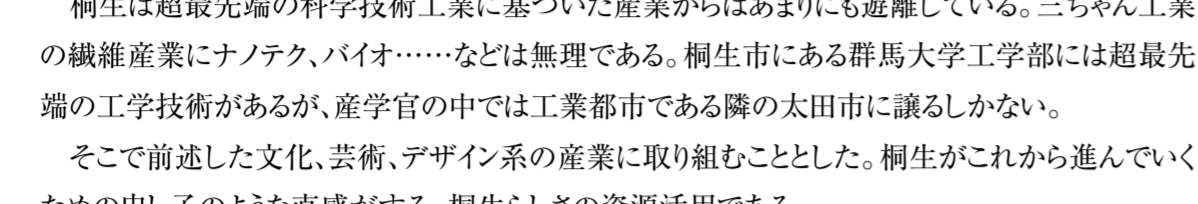
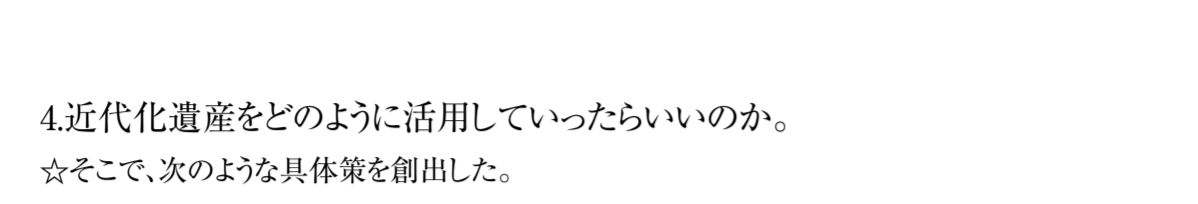
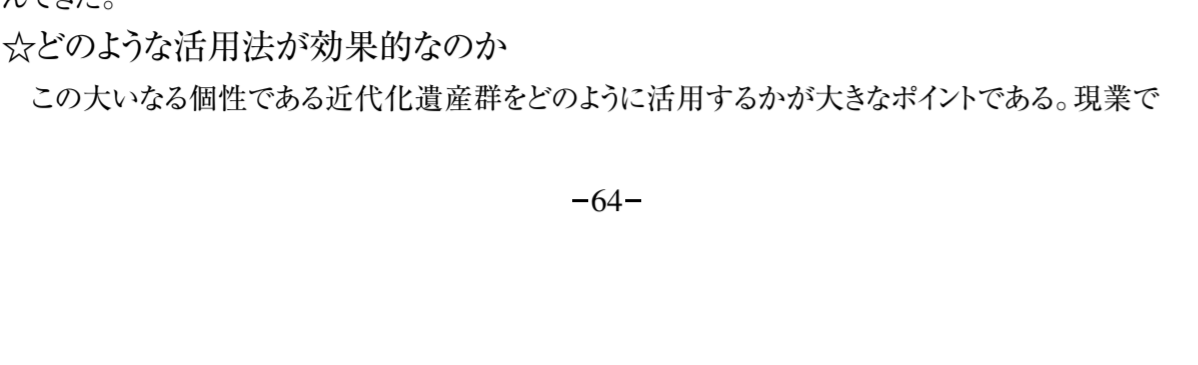
江戸時代に行なわれた日本初の都市計画といわれる町割り（地割り）や織物に使われていたさまざまな産業・文化遺産が町中に点在し、今もその面影を残すのみならず、そのままだで生活行われている現況である。近代化遺産の宝庫といわれる群馬県の中にあって創生はエリアに残っている日本でも数少ない地域と言えるところである。もともとこれらは工場などであり、織物に点在しているもので余り目立たないが、ノコギリ屋根建造物にいたってはまさに世界一の特徴が現れ、現存している近代化遺産では日本一の個性を持っている都市である。

まちづくりと言えど一般的な研究者や専門家も様々、その地域の個性を生かせ、と云う。創生には現代社会の基礎を築いた日本の歴史的産業遺産である近代化遺産が町中に現存している。この中には当然無形のものづくりの伝統的技術や匠たちの魂も残されている。先進的なことに対する敏感さは抜群であり、食文化しかりである。この歴史的個性のある資産（資源）を活かすことが創生から日本へ、そして世界へ大きな影響を投げかける（街）づくりでありたと認識して取り組むべきである。

☆どのような活用方法が効果的なのか

この大いなる個性である近代化遺産群をどのように活用するかが大きなポイントである。現実で

－64－



利用しているものはその機能を充分果たしていると言えるが、利用されずに残っているものについては有効に活用することができる。生きも死ぬもこの活用方法如何に係わっている。私達は長い思独創的な活用のヒラメキ（アイデア）を思考し続け、そして創出し、実践を始めた。

3.創生の生き方

これからの創生の発展は日本の発展の仕方に大きく係わっている。そして、日本の発展は世界の動きを注視しなくてはならない。

戦後日本は世界中で安定しなら急速に進展し、経済成長を成し遂げた成功例となっている。しかし地球規模の視野で考えてみると、今まで先進国の一員として進んできたモノ主義経済（物質文明主義）の弊害も今後の後進国の現状を見るにつけ、誠に憂慮すべき事実がある。また「モノ」で人が幸せを感じる時代は終わった。このような事実を踏まえた上で、では成熟した先進国日本の果たすべき地球規模的役割は何かと言え、次に述べるようにである。

☆成熟した先進国がなすべき生き方（役割）

先進国は地球の将来を先導する役割を担っている。何をなすべきか。それは、超最先端の科学技術工学に基づいた産業による社会の構築、また高度な情報産業や文化、芸術、デザイン日本としての取り組みがあげられる。なお、観光産業やスポーツ、高度医療、ボランティア等もこの日本を担う立国論のひとつにあげられるであろう。

☆創生はどのようなまちづくり（都市再生）がいいのか

<文化・芸術・デザイン系の適性>

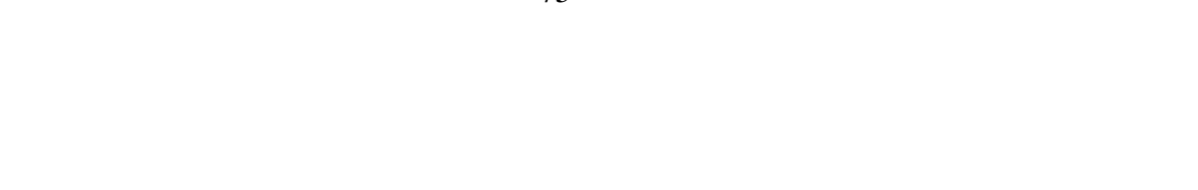
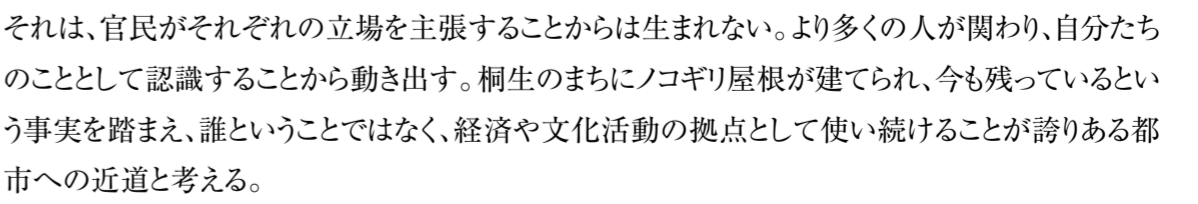
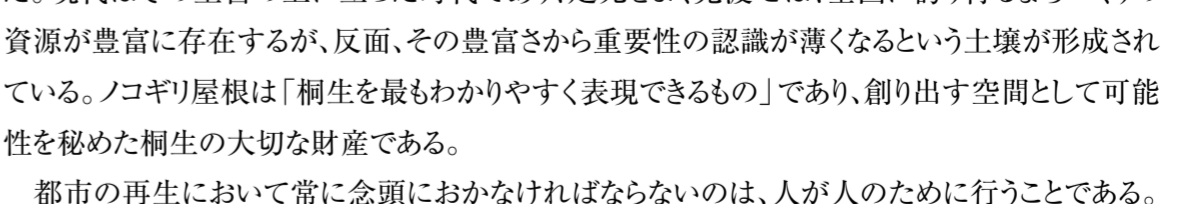
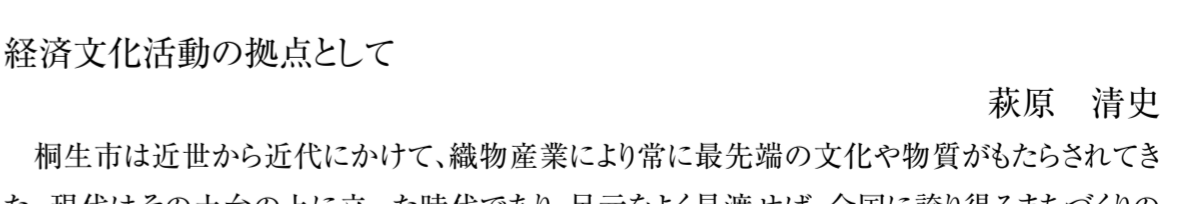
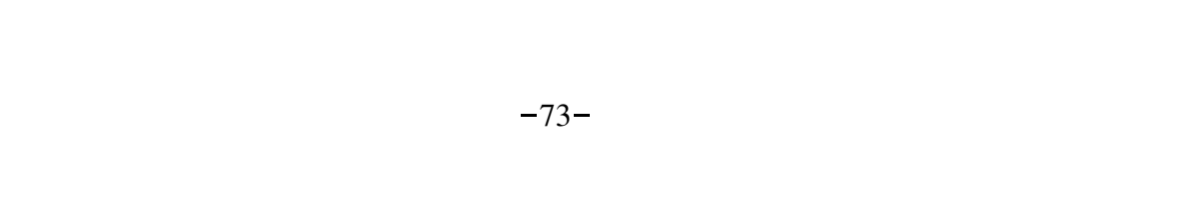
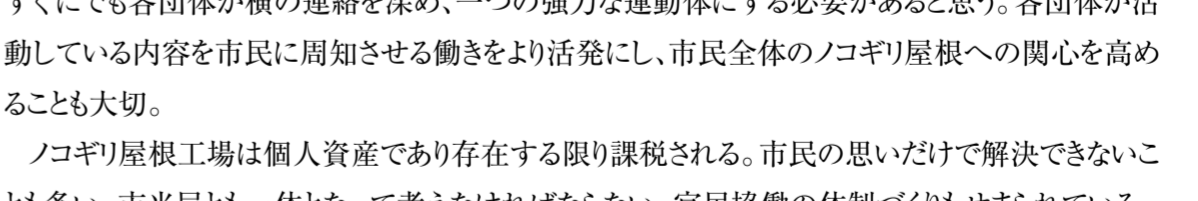
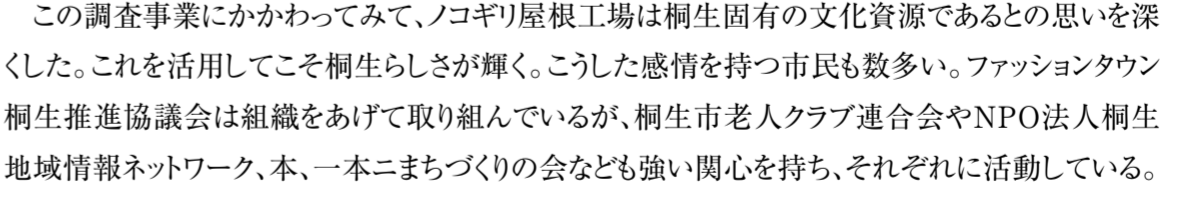
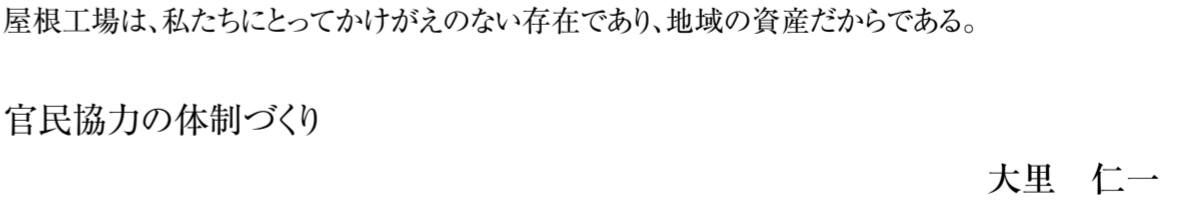
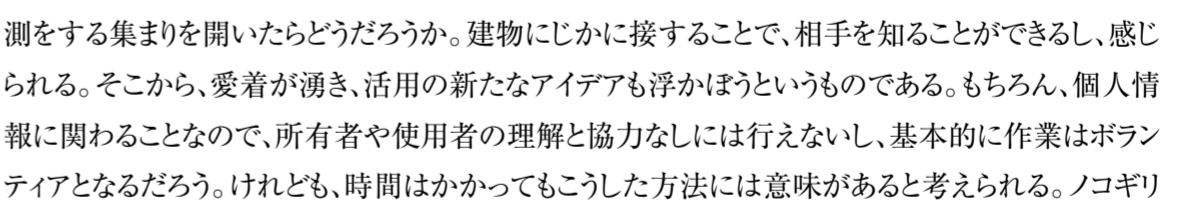
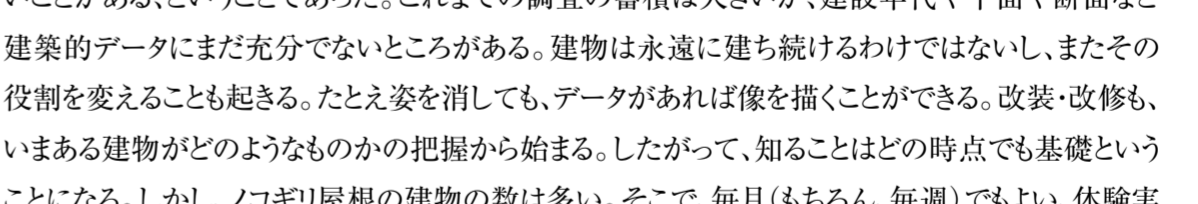
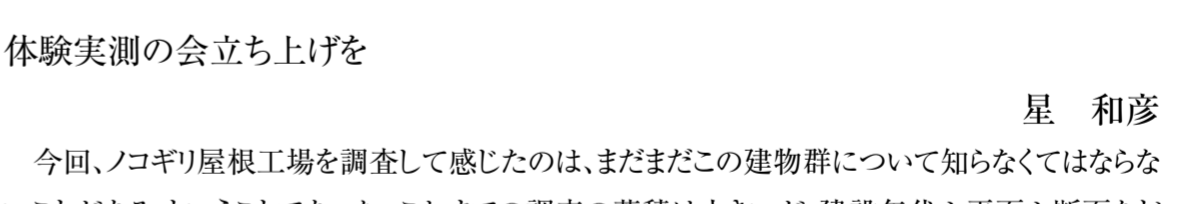
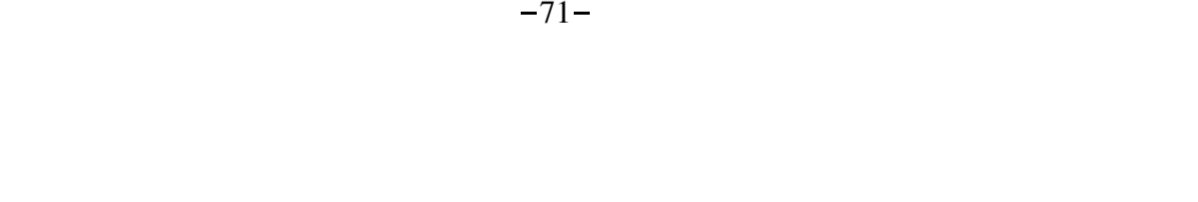
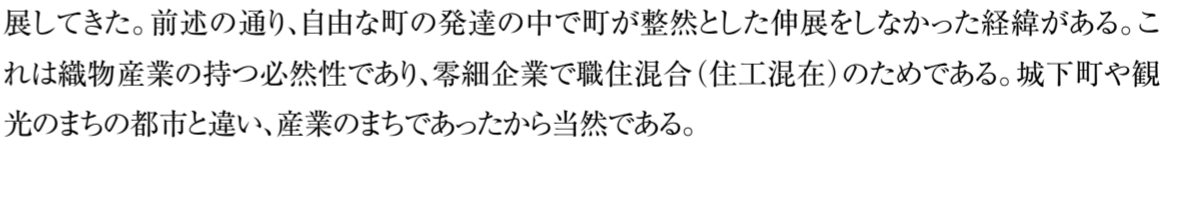
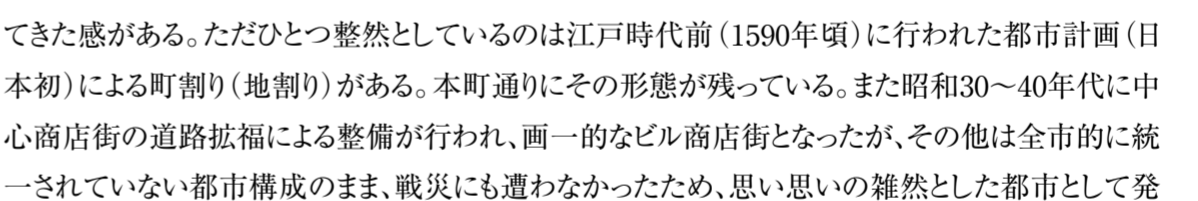
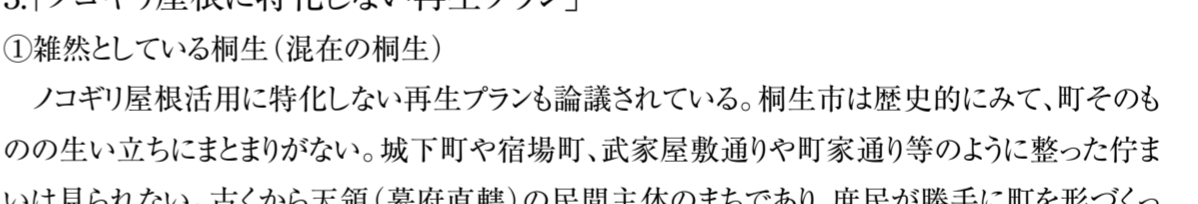
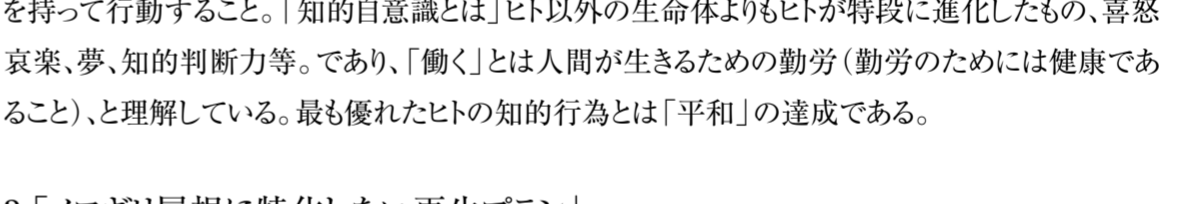
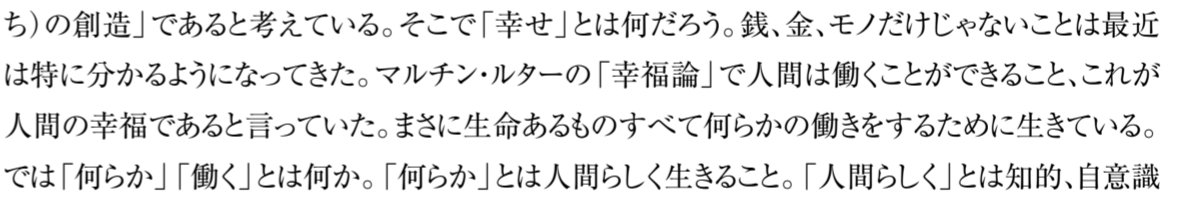
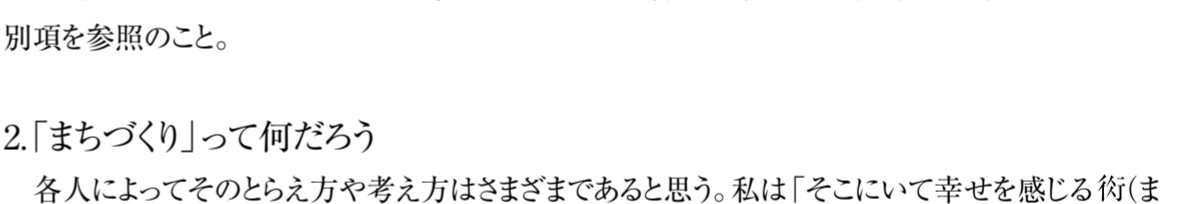
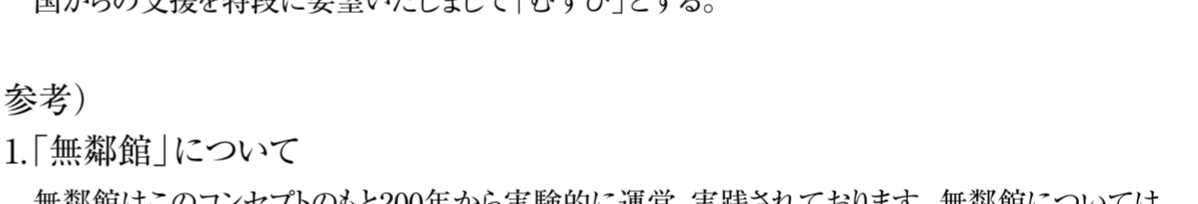
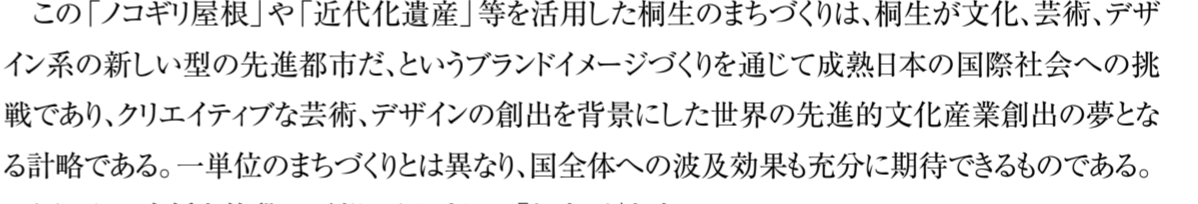
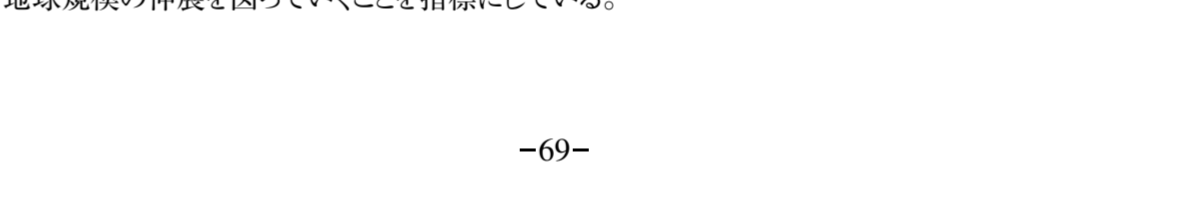
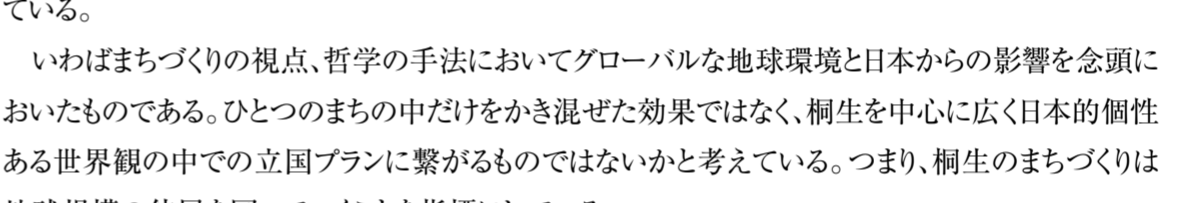
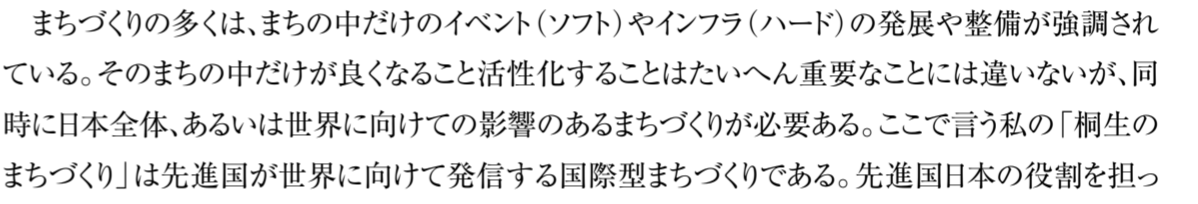
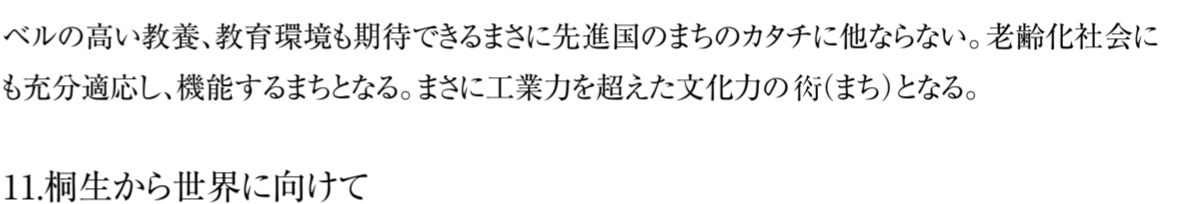
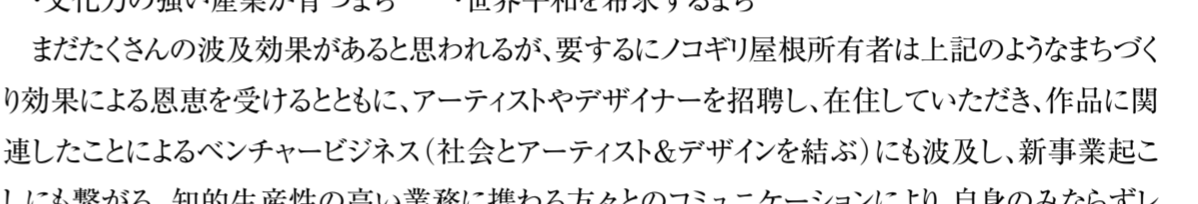
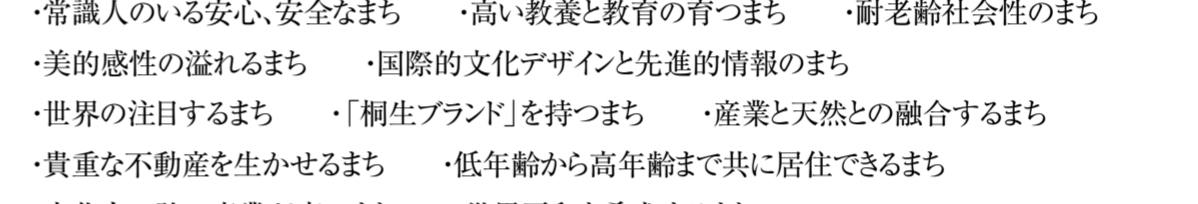
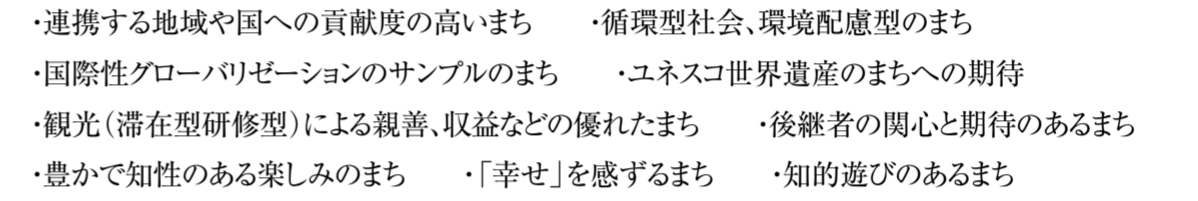
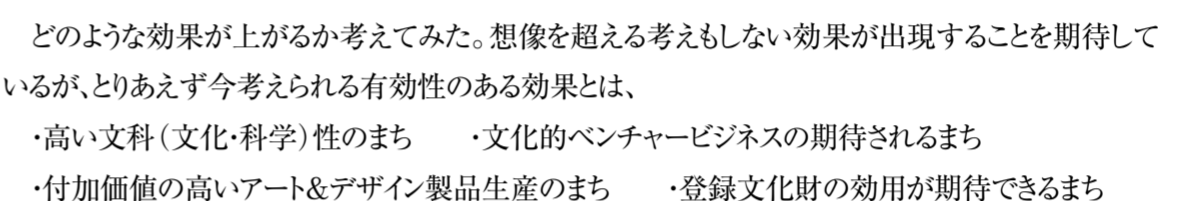
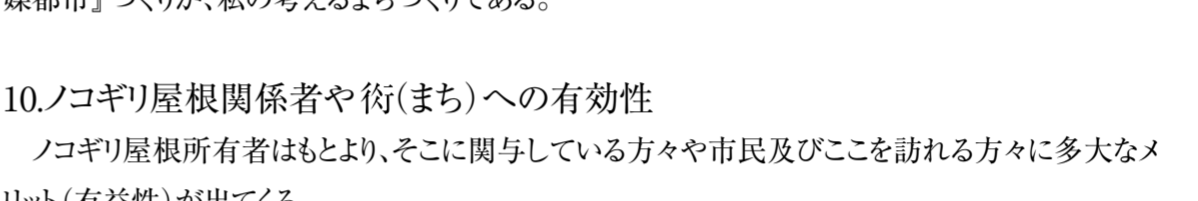
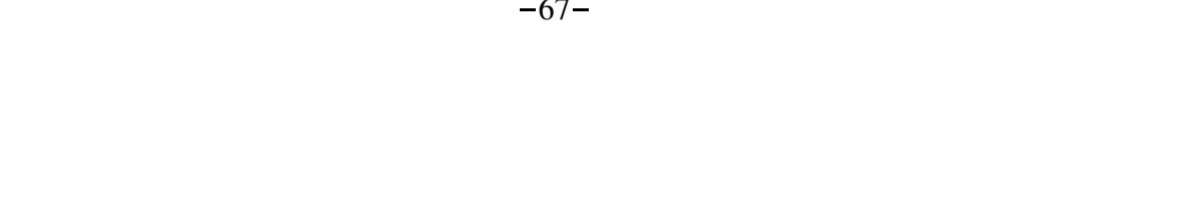
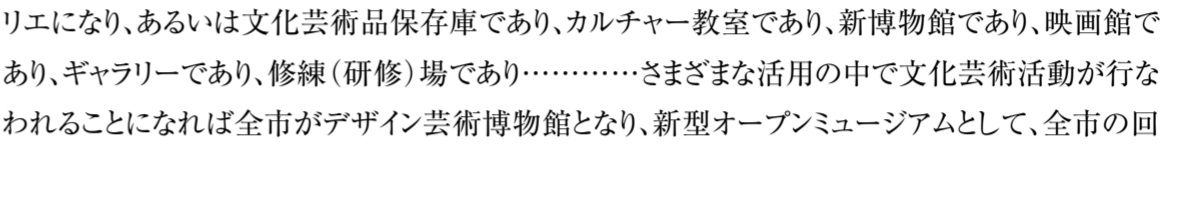
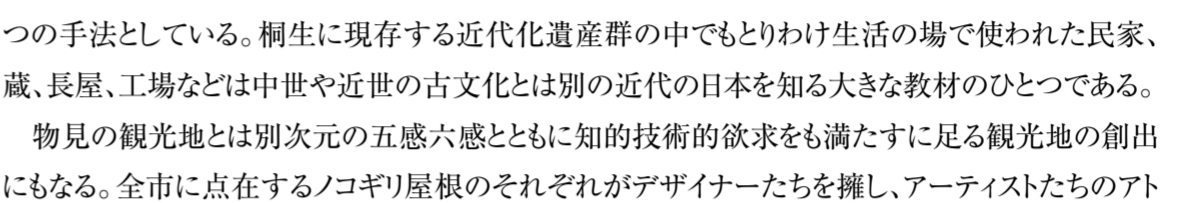
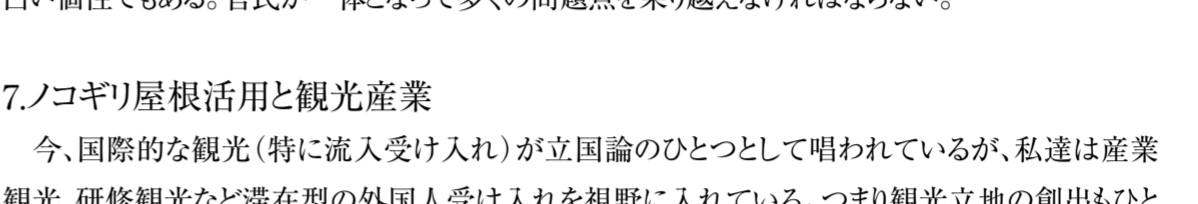
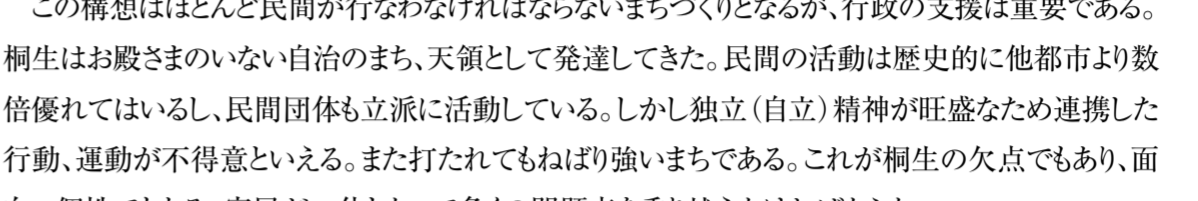
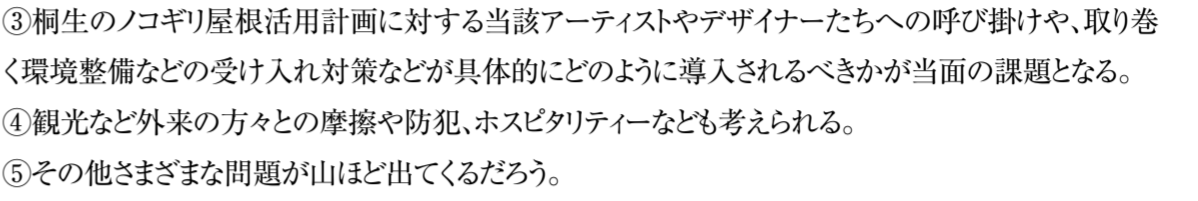
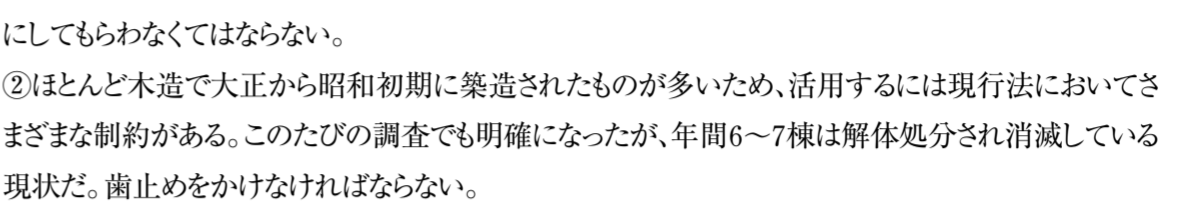
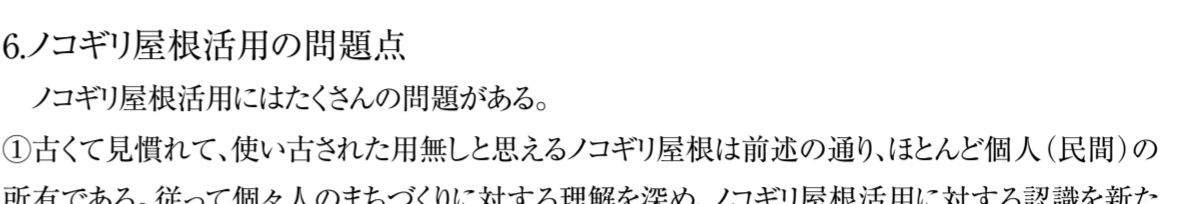
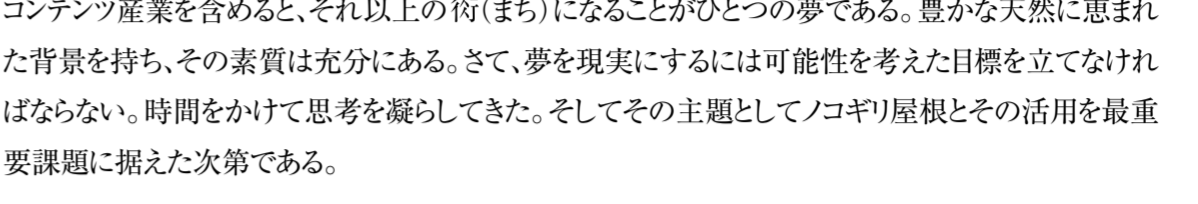
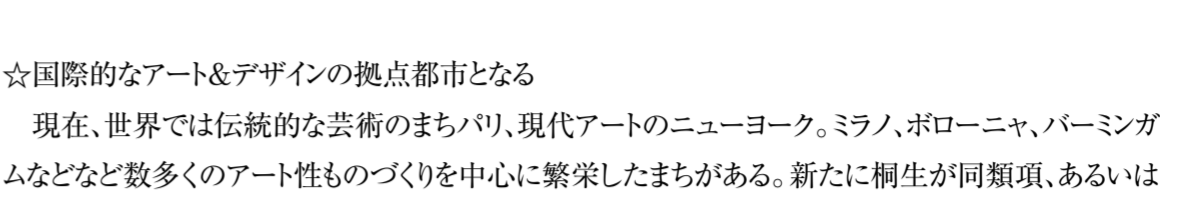
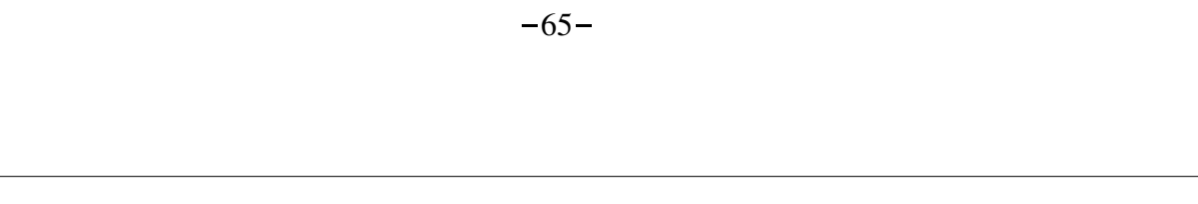
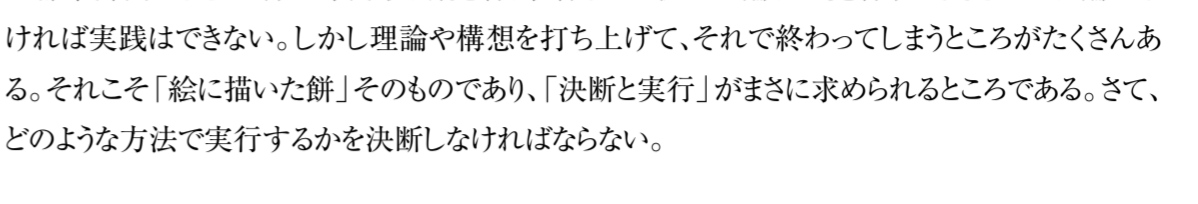
さて、創生は千も年続いた織物文化産業が大きな個性であることは前述した。これはとりもなおさず繊維工業の中にあっても創製品の生産性を支え、ベースとなったデザインと繊細なものづくり技術から生まれる特異なセンス、そしてここから創りだす新たな流行りくもの創造性を生産してきた職人業の技術、これが織物を生業としてきた創生人の先駆者の気質であり、他都市に見られない個性である。

これこそ創生が長い歴史の中で今でも受け継がれ残されている（街）のDNAであり、伝統である。何とな建造物も重要な要素は、その個性を失わないことである。特にストップの活用は情報社会のモデルである。

この双方をうまく活かした文化、芸術、デザイン系を中心に据えたまちづくりが創生には最高の個性を活かした都市再生の核になると確信しているところである。また、並行して、これははたっく別に新しい創生の個性づくりを勧誘するために具体的企画をすすめている（全日本的企画になる）。

☆いかに実現させるか

都市計画やまちづくりの専門家、研究者、学者などは机上の論理が先行する。もちろん理論がなければ実践はできない。しかし理論や構想は現実になると確信しているところである。また、並行して、これははたっく別に新しい創生の個性づくりを勧誘するために具体的企画をすすめている（全日本的企画になる）。どのような方法で実行するかを決断しなければならぬ。



進性と定住研修型の新規観光都市の出現となる。これからの先進的まちづくりスタイルの多くを包含する（街）に変身（進化）する。もちろん大きな経済効果をもたらすことは当然であるが、私は経済効果などよりもこれからの長い日本の歴史を考えた中で、長期安定して価値の高いまちづくり効果を創出することを重要と考えている。ノコギリ屋根の小美術館、演劇、音楽館やデザイナーのトリエ、そして美しいノコギリ屋根の傍らのポケットパークでひと休みなど、ノコギリ屋根廻りも楽しみになる。

☆群馬県のエスノ世界遺産へへの取組み

群馬県の近代化遺産の中でも特に優れている富岡製糸工場跡をメインとした、絹の地域（シルクントリー）を全体でとらえたシステムとして近代化遺産がエスノ世界遺産への挑戦をするにあたって創生のノコギリ屋根群を無視しては語れない。日本の世界遺産は広域歴史ゾーンを除いてすべて近代以前のものであり、日本の現代社会を生んだ近代（現代）は時の歴史の証明を留めている

は群馬の近代化遺産がもっとも貴重で重大なものである。近代化遺産はシステムで考えない、とは村松貞次郎先生の語である。富岡製糸工場跡と関連システムがエスノ複合遺産（世界遺産）に認定されるよう運動を展開している。ノコギリ屋根群が世界遺産の仲間入りできるとすると日光や公舎の原点である旧足尾銅山ほかとの連動で周知も可能となり、国際観光の新しいこの地への受け入れムーブメントになる可能性を秘めている。測り知れない効果が期待される。地域の連帯による広大なまちづくりになる。

8.まちづくりと世界平和

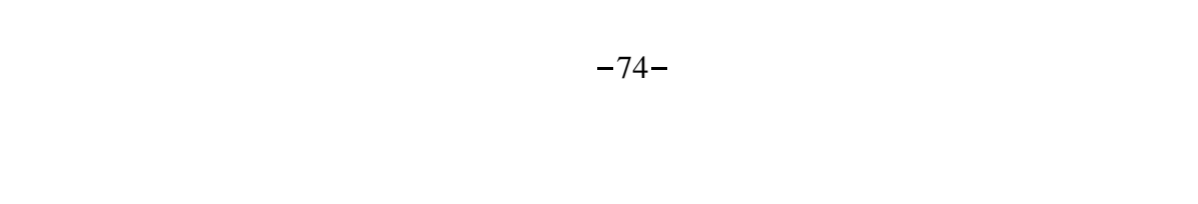
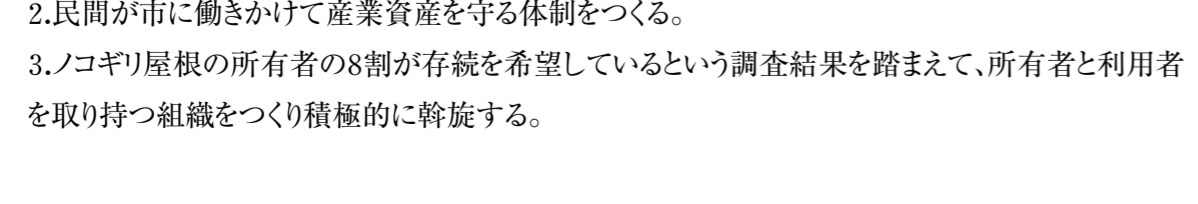
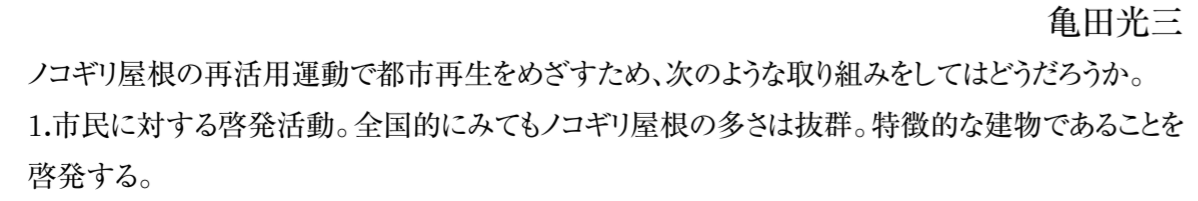
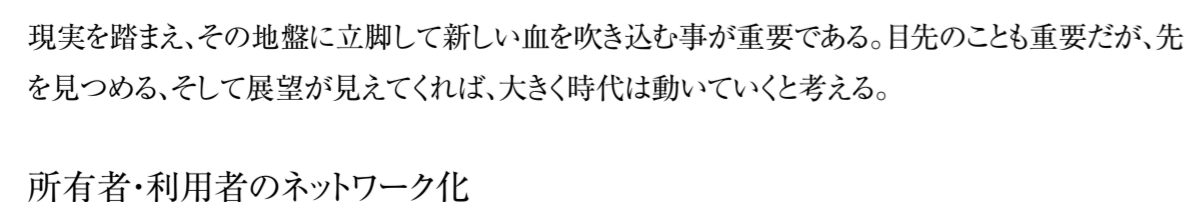
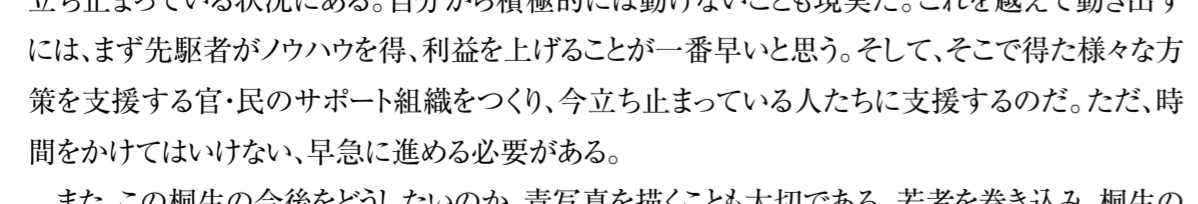
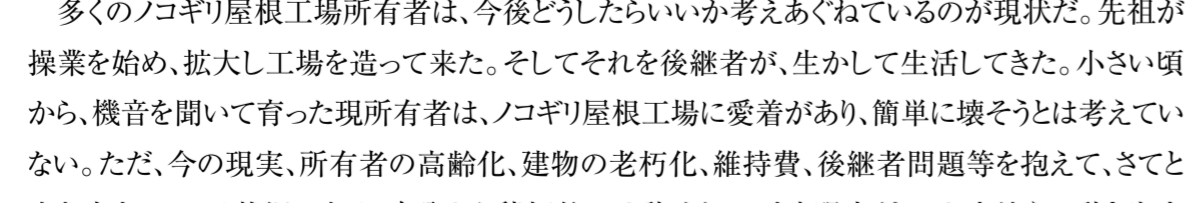
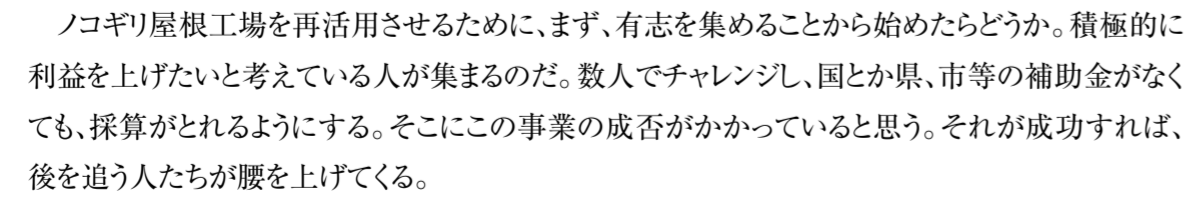
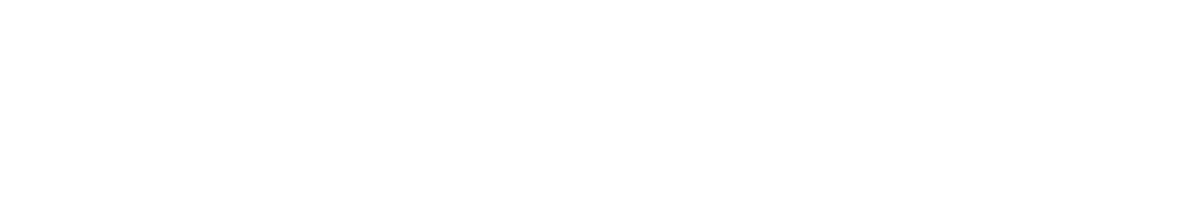
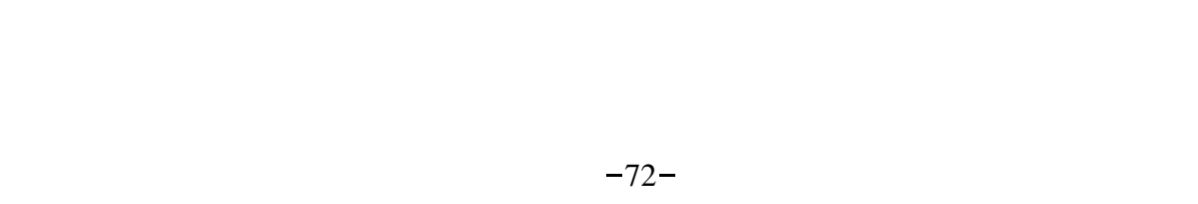
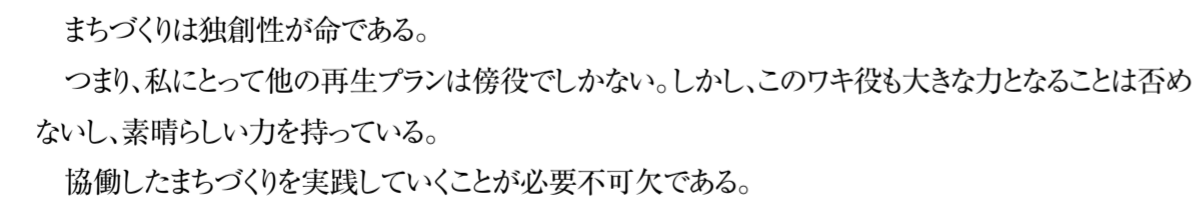
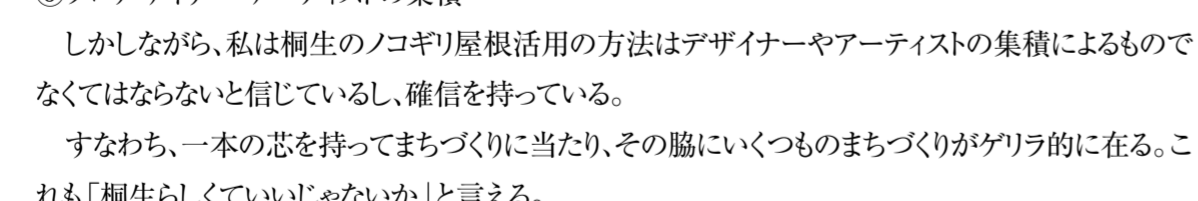
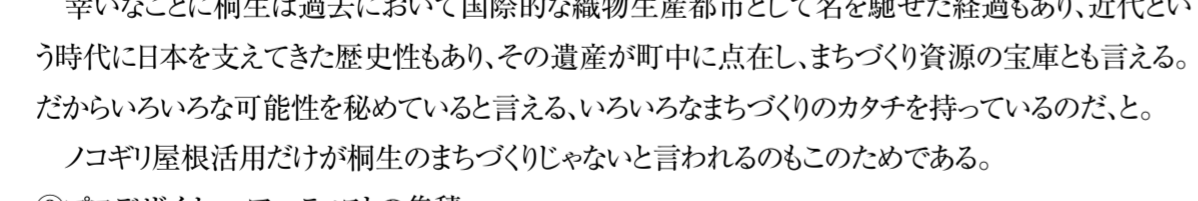
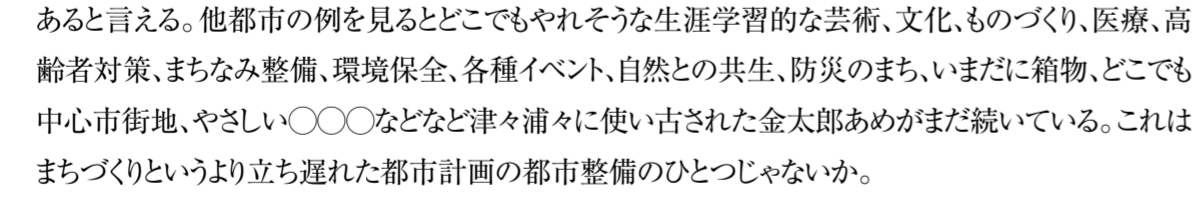
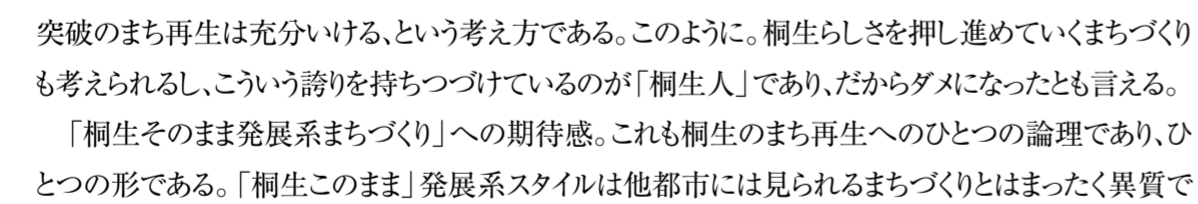
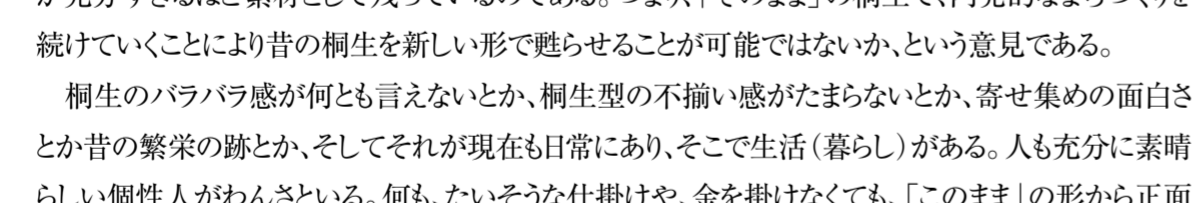
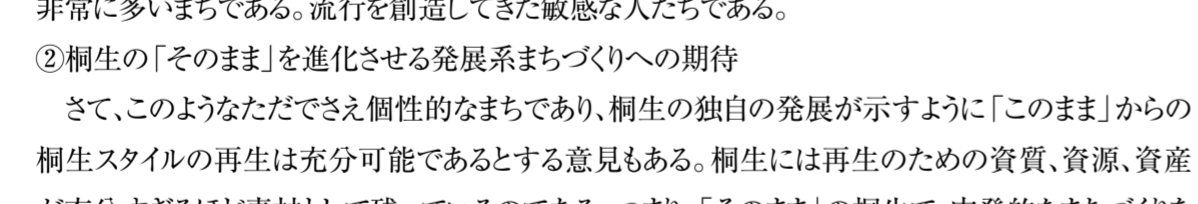
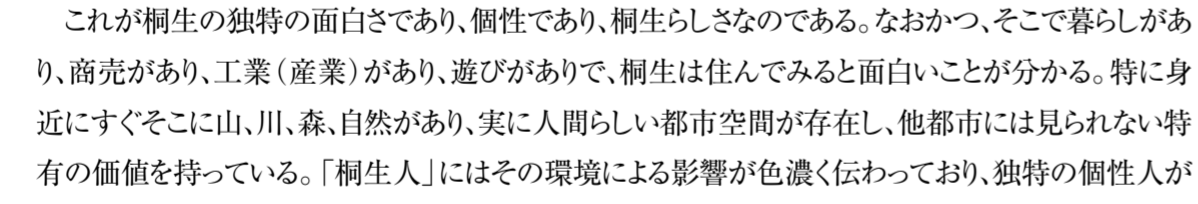
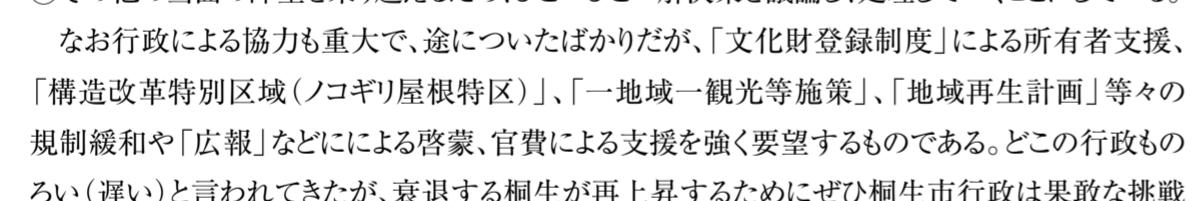
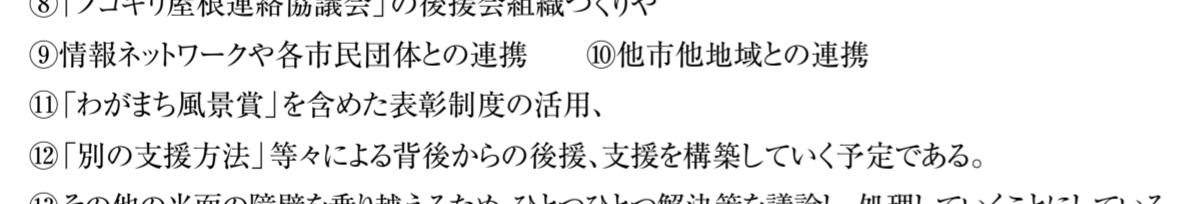
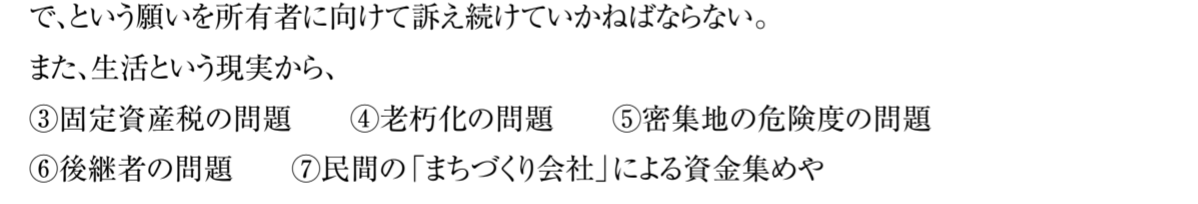
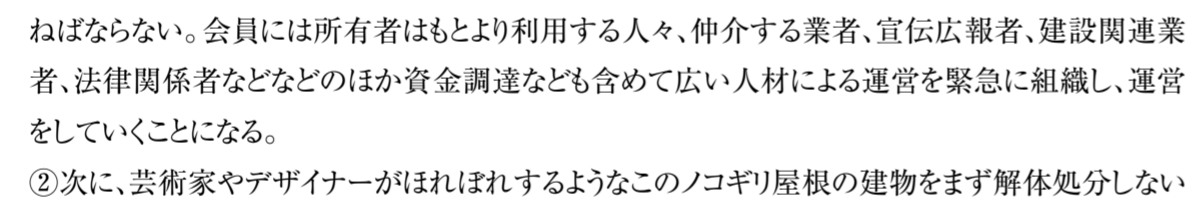
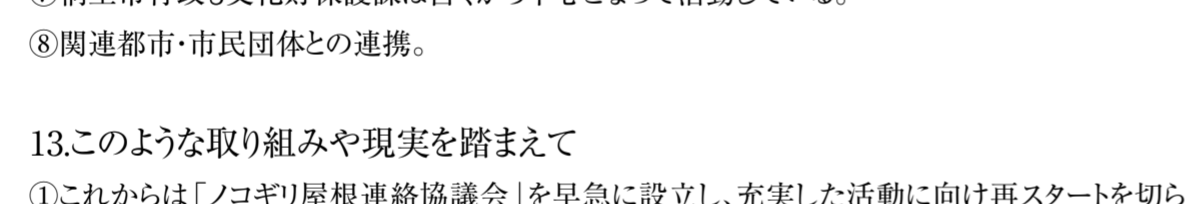
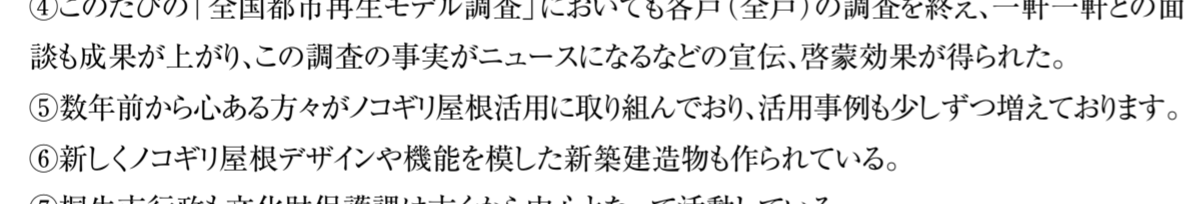
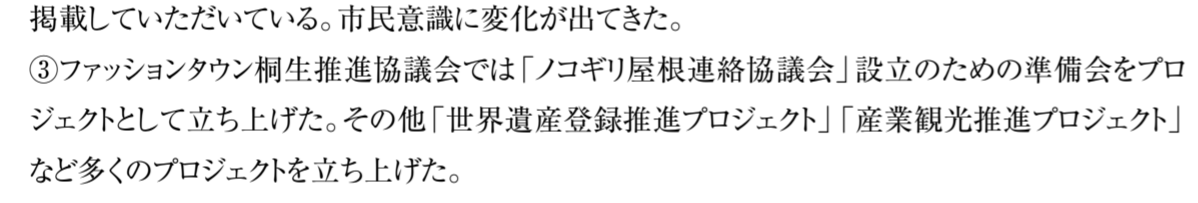
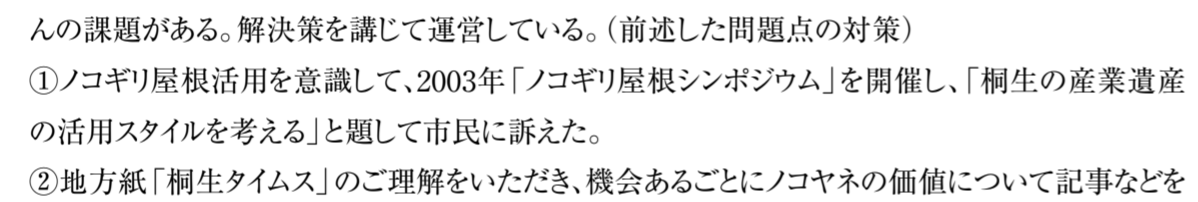
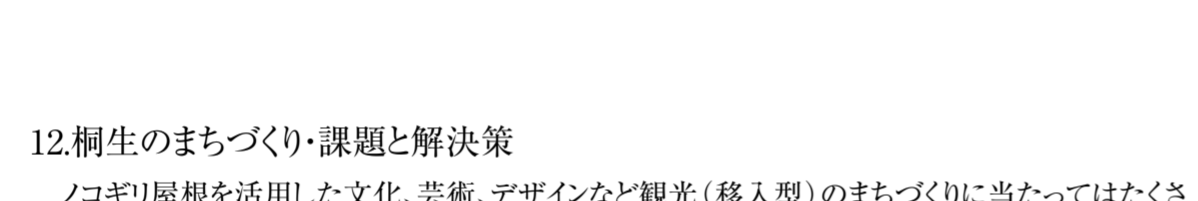
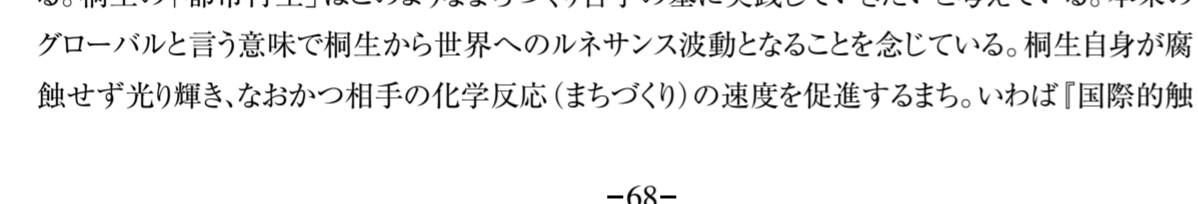
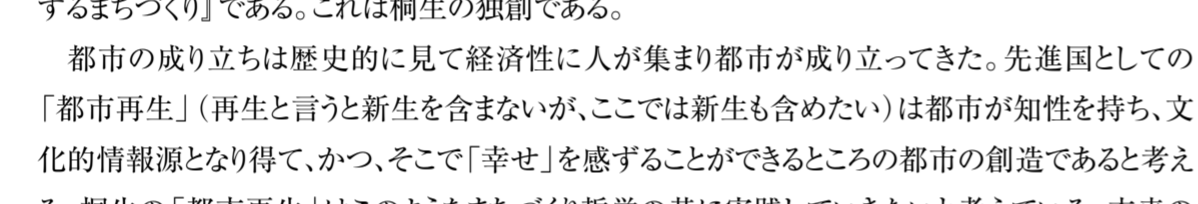
国際的なプロのアーティストやデザイナーたち、そして国際的な観光客たちとの研修型滞在型の知的国際交流、国際親善はその人々の親密な関係をとおして民族、宗教、思想を超えた人類愛、友情、そして世界平和への地道な貢献になる。まさにエスノの世界平和に密着し繋がっているところである。世界中の人々が戦争に疲れ、あきあきしている。創生から小さな世界平和への実践が始まっている。まちづくりの重大な目的のひとつである。ファッション創生推進協議会の中でもエスノ協会と連携して「ノコギリ屋根世界遺産プロジェクト」を組織し、実現のための研究活動を続けている。

9.知的ある都市再生（国際的触媒都市・創生）

都市再生とは、そこを訪れたら、在住したりする人々が誇りを持って「幸せ」を感じる場づくりと言っていると思う。よ（まちづくりは人づくり、など）とされているが、創生のまちづくりは「人づくりをするまちづくり」である。これは創生の強みである。

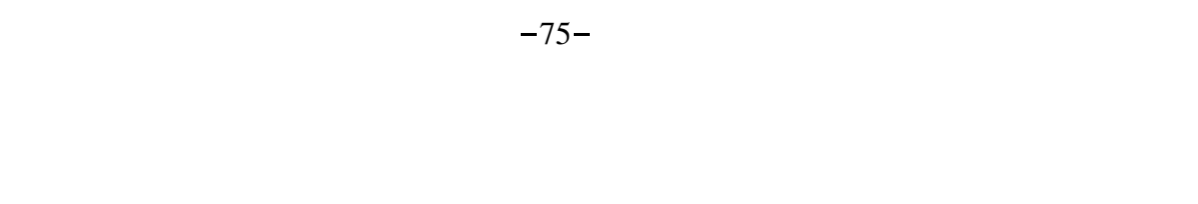
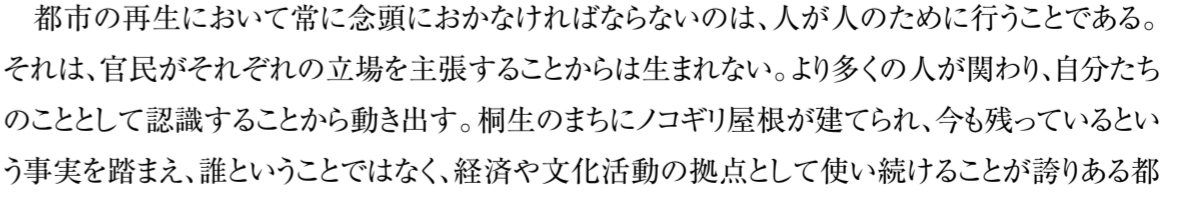
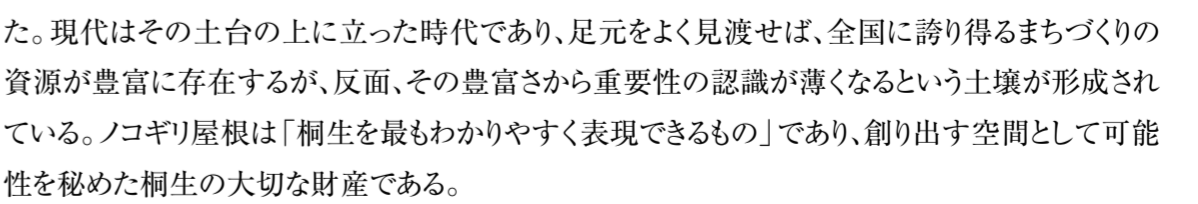
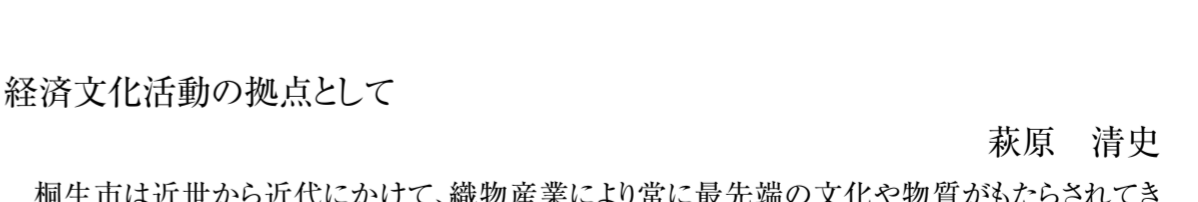
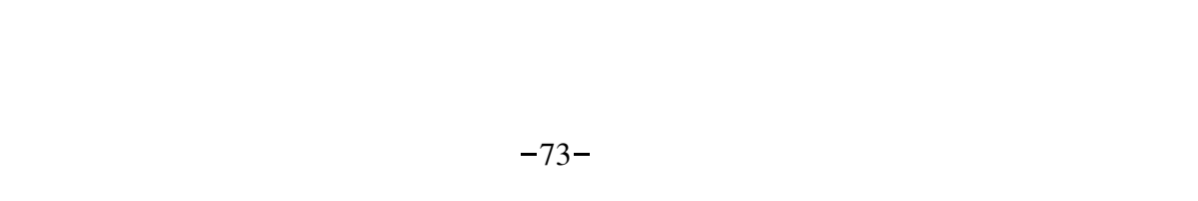
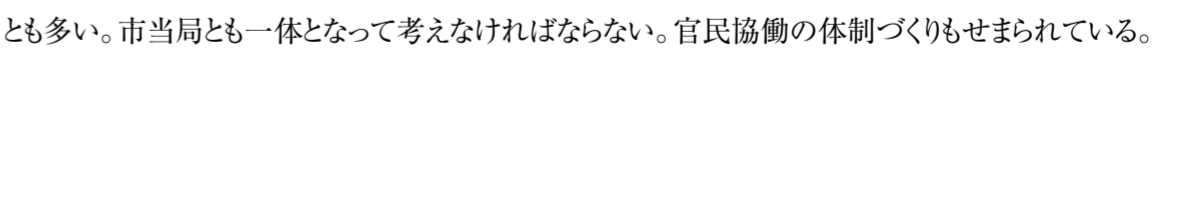
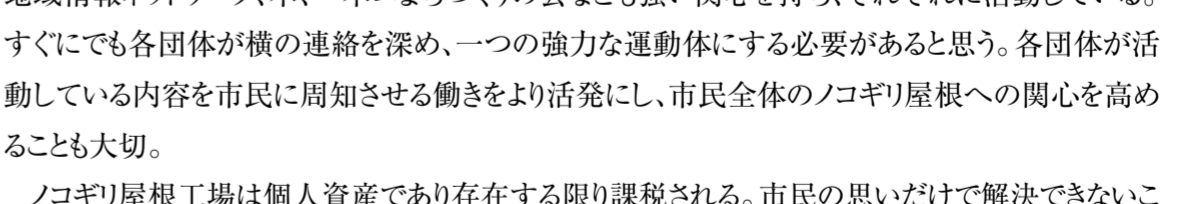
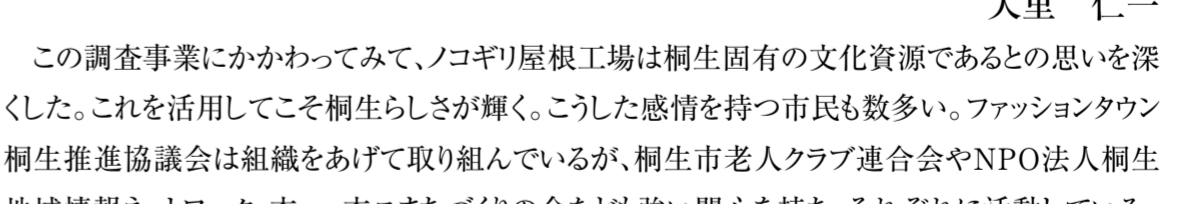
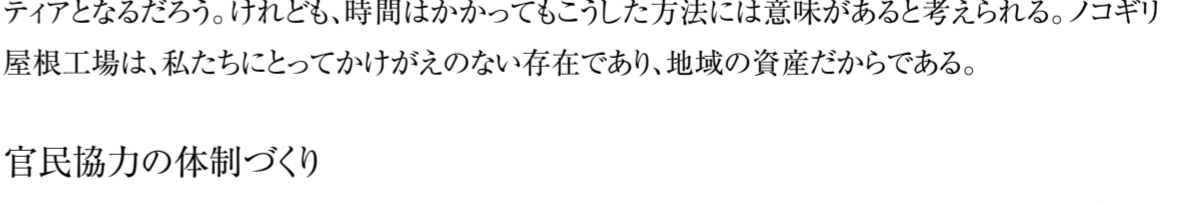
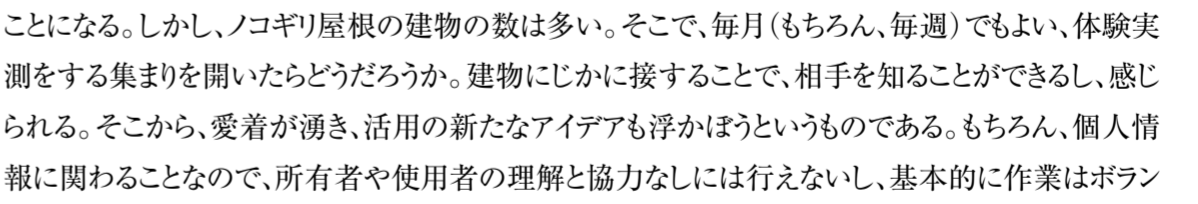
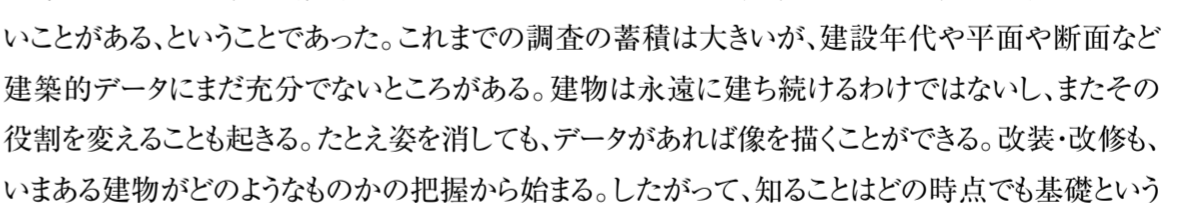
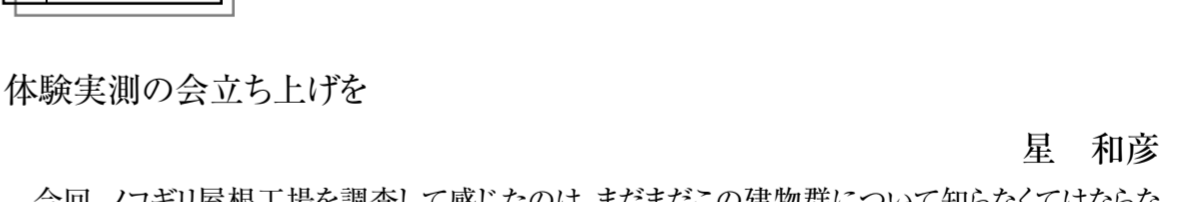
都市の成り立ちは歴史的に見て経済性に人が集まり都市が成り立ってきた。先進国としての「都市再生」（再生と言うと新生を含まないが、ここでは新生も含めたい）は都市が知性を持ち、文化的情報源となり得て、かつ、そこで「幸せ」を感ずることができる都市の創出であると考える。創生の「都市再生」はこのようにまちづくり哲学の基に実践していきたいと考えている。本来のグローバルと言う意味で創生から世界へのルネサンス波動となることを念じている。創生自身が腐蝕せず光り輝き、なおかつ相手の化学反応（まちづくり）の速度を促進する。いかに「国際的触

－68－



第6章

2.都市再生への提言



所有者・利用者のネットワーク化

ノコギリ屋根の再活用運動で都市再生をめざすため、次のような取り組みをほとうだろうか。
1.市民に対する啓発活動。全国的にみてもノコギリ屋根の多さは抜群。特徴的な建物であること、啓発する。
2.民間が市民に働きかけて産業資産を存続を促している。
3.ノコギリ屋根の所有者の8割が有税を志望しているという調査結果を踏まえて、所有者と利用者を取り持つ組織をつくる積極的・積極的。

佐々木 正純

ノコギリ屋根工場を再活用させるために、まず、有志を集めることから始めたところか。積極的に利益を採算したいと考えている人が集まるのに。教員でチャレンジし、国と県、市等の補助金がなくても、採算がとれるようする。そこにこの事業の成否がかかっていると思う。それが成功すれば、後を追う人たちが要をよけてくる。

多くのノコギリ屋根工場所有者は、今後どうしたらいいか考えあぐんでいるのが現状。先祖が操業を始め、拡大工場を造って来た。そしてそれを後継者が、生かして生活してきた。小さい頃から、機曾を見て育った現所有者は、ノコギリ屋根工場に愛着があり、簡単に譲りたがる者はない。個性が強い。今の現実、所有者の高齢化、建物の老朽化、維持費、後継者問題等を抱えて、さて立ち止まっている状況にある。自分から積極的には動かないことも現実だ。これを越えて動き出すには、まず先駆者がノウハウを得、利益を上げることが一番早いと思う。そして、そこで得た様々な方策を支援する官・民のサポート組織をつくり、今立ち止まっている人たちに支援するのだ。ただ、時間をかけてはいけない、早急に進める必要がある。

また、この創生の今後をどうしたいのか、青写真を描くことも大切である。若者を巻き込み、創生の現実を踏まえ、その段階に見立てれば、大々時代は動いていくと考える。

所有者・利用者のネットワーク化

ノコギリ屋根の再活用運動で都市再生をめざすため、次のような取り組みをほとうだろうか。
1.市民に対する啓発活動。全国的にみてもノコギリ屋根の多さは抜群。特徴的な建物であること、啓発する。
2.民間が市民に働きかけて産業資産を存続を促している。
3.ノコギリ屋根の所有者の8割が有税を志望しているという調査結果を踏まえて